

---

# 転生しました……原因は分かりません

緋翠

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生しました…… 原因は分かりません

### 【Zコード】

Z5771Z

### 【作者名】

緋翠

### 【あらすじ】

転生したのは誰？

あなた？ 僕？

「いいえ、私はです。」

「何を言つてゐるの？」

「ああ？ なんでしょう？ アスナ」

「言いましたよね私は“何があつても私がお嬢様たちをお守りします”つて、アルトお嬢様」

「刹那、私は男ですよ」

転生をした男の娘の話です。

## プロローグ（前書き）

頑張つて行きます

## プロローグ

突然の事でした

道路から車が飛び出して来て跳ねられました。

神様が言つには即死だつたそ'うです。

あ、今僕は神様の目の前に居ます

俗に言つあれですかね？

転生をしてくれるんですかね？

「うん」

神様は心が読める様です

「読めるよ」

黙つてなさい！！

今説明中なんですか

「は、はい」

涙目に成りながら返事をする神様……

その外見に合つた仕草ですね。

神様の外見はF a t eのイリヤスフイールと一緒にだ

「……」

お~、涙を堪えて体がプルプルしてますね。

可愛いです。

「…………もういい?」

首を少しだけ曲げながら聞いてくる神様

良こですよ

「じゃああなたを転生させるね。外見や能力は私（緋羅）が決めと  
いたから、あと向こうの君の名前は…… 考えて無いや」

考えて無いんですか？

「うそーーー。」

神よ、それでいいのか？

「良いんだよ、私がルールだからーーー！」

無い胸を張りながら言つた

「ふえーん、胸についてはなにも言わないでよーーーもうここ、い  
つちやえーーー！」

無理やり転生せられる

からかい過ぎましたかね？

まあ良いや。

折角の一度目の生

楽しみましょうかね？

今度こそ……

長生をやめることを目標に……

**設定（前書き）**

**設定ツス**

## 設定

名前  
アルトリア・ロア  
(皆からはアルトと呼ばれる)

一人称  
私

性別  
男の娘?

外見

Fateのセイバーの髪の色を銀色にしただけ  
身長はネギの頭が目線ぐらいの小ささ

ネギまの世界に転生してからはエヴァの家に世話になる

初期能力 (Fate風に)

筋力	C	(C)	魔力	B	(B+)
耐久	B	(B+)	幸運	C	(C-)
俊敏	B	(B)	宝具	A++	

( ) はライオンハート入手後

対魔力 B

転生した時にもらつた能力。雷の暴風、位の魔法なら傷付かない

騎乗 C

馬になら難なく乗れるが自在に操るには時間が必要になる。自転車なら余裕

保有スキル

直感 A

戦闘時、常に自身にとつて最適な展開を“感じ取る”能力。研ぎ澄まされた第六感はもはや未来予知に近い。視覚、聴覚に干渉する妨害を半減させる

魔力放出 C ~ A -

武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間に放出する事によって能力を向上させる

カリスマ D

男女問わずモテる 本人は正直いらないと思っている

黄金律 D

まあ遊びに使うお金程度には困らないほどのお金を手に入れれる。生活するほどのお金は入らない

神性 D

神様に転生するときに関わりを持ったため手に入れた

戦闘離脱 C +

自分がどんな不利な状況でも離脱する事に専念すればどんな状況でも高確率で離脱出来る

そのさいに、一緒に離脱する人数により確率は低下する

精霊の加護 B

精霊からの加護により、危機的な局面なら一時的に幸運をA+まであげる能力

気分屋 C++

天性的な気分屋 その為魔力放出のランクが変動しやすい

宝具

風王結界 (インビジブル・エア)

ランク C (精霊の加護発動時はB)

不可視の剣。

シンプルではあるが白兵戦において絶大な効果を發揮する。

強力な風の精霊によつて守護され不可視になつてているだけで剣自体が透明という訳ではない。

約束された勝利の剣エクスカリバー

ランク A++

光の剣。人造による武器ではなく、星に鍛えられた神造兵装。マジックアイテムの枠に收まらない程の物  
数ある聖剣のカテゴリーの中では頂点に立つ宝具

所有者の魔力量を飛躍的に上げ収束・加速させる事により運動量を増大させ、最大レベルの魔法行使を可能にする

## 全て遠き理想郷（アヴァロン）

ランク EX

エクスカリバーの鞘の能力鞘を開き、自身を別の次元に置くことであらゆる物理、もしくは精神干渉をシャットアウトする持ち主の魔力が尽きない限り常に治癒魔法を掛け続ける この魔法に持ち主の魔力は使用しない

仲間を護る強き獅子ライオンハート

ランク B +

アルトのネックレスに魔力を流すと現れる武器

魔力を刃とし流す量に応じて切れ味があります。

嘗て未来の魔女から世界を救つたとされる孤高の戦士の愛用武器ガンブレードの一種

魔力で編まれている刃ではあるが基本最初の状態では持ち主の魔力は消費しない

誇り高き獅子の心ライオンハート

## ランクB

ネックレス状態の能力

魔力、耐久、幸運を常時装備しているだけで多少アップさせる。

性格

気分屋だがやることはやる

誰にでも変わらず接するので皆から好かれやすい

所属クラスは3 - A

エヴァには転生した時に何も分からない所を親切にしてもうつた恩  
がある

増えるかもしれません

## 修学旅行 その1（前書き）

大部分飛ばして修学旅行編

間の話は設定の部分に簡単に書いていきます

## 修学旅行 その1

転生してからいろいろありました。

詳しく述べて設定を読んでね！

修学旅行に行く事になりました。

エヴァにお土産を沢山買って行きたいと思います。

班は六班で刹那とザジ達と一緒に三人だけになってしまったのでネギ先生に他の班に入れられる事になりました。

アスナ達の班ですね。

一応言つて置きますが私がこのクラスに所属したのは学園長が「ま、見た目女の子じゃしゃいいじゃろ」

なんて理由で女子中学生になつて居ます。制服も勿論ちゃんと着てますよ。

私が男なのは嘘さんじ存知ですかうね。

あ、あとこのクラスに私が魔法関係者だと知っているのはエヴァと

茶々丸だけです。

私は平凡な毎日が好きなため警備の仕事は断っているんです。

ネギ先生だつて知りません。

あ、電車が発車しますね。

席に着かなければ……

その頃学園では

キーンゴーン…

「ふう」

屋上にエヴァと茶々丸がいた

「今頃アルト達は新幹線かあ

ほけ～としながら躍り飛んで

「マスターは呪いのせいで修学旅行にいけず残念ですね」

「……オイ何が残念なんだ?別にガキ共の旅行など」

「いえ行きたそうな顔をしていたの…」

「アホか、それよりお前行つても良いんだぞ行きたいんだろ?」

「いえ、私は常こマスターのお側に」

「……ふん(アルトの奴ちゃんと土産買つてくるかな?)」

その頃のアルトリニアは

「スウ……スウ……」

寝ていた。

電車の中で起きた騒ぎに気が付かず……

すると朝倉が近付いてきて

(アルトの寝顔を頂きつつ)

写真を撮っていた

するとまき絵が近付いてきて

「朝倉、後でその写真頂戴」

「あー私も~」

そう言ってクラスの大半の手にアルトリアの寝顔写真が渡った

勿論その間も

「……スウ……スウ……」

アルトリアは寝ていた

京都に着きました

まずは清水寺に行き皆で集合写真を撮りました

そこから多少の自由行動が許されます

清水寺でいらに来たのなら音羽の滝に行って健康の水を飲みましょう

音羽の滝に着くと醤からお酒の臭いがします。

何故でしょう?

するとその後すぐにバスに押し込まれ旅館に向かった

なんかのんびり楽しめませんね。

まあ旅館に着いたらお風呂に入りましょ。

お風呂

「はあ～なんか慌ただしい修学旅行ですね」

クラスの大半がお酒に酔つて凄い問題だと思つんですね私は

さて、もう少しあり上がりますか

お風呂から上がり、ロビーに行くとアスナと刹那が慌ただしく出で  
いきました。

何か有ったのでしょうか？

気になつたので追いかけましょ

なんて思うんじやなかつた。

走つて追いかけると駅に着いて電車が出よつとしています。

ネギ先生達は乗り込めたのだが私が着いた時にはもう動き始めた。

「仕方ありません。エヴァからの頼みも有りますし上に乗りりますか」

電車の上に乗り少したつと駅に着きました。猿の着ぐるみを来ている人を追いかけているみたいですね

と、言うかあの三人まだ私の事に気付いてないみたいですね

それから少したつやく会話が聞こえる位に近づくと

「 テル・マ・スキル・マギスティル風の精霊11人縛鎖となりて  
敵を捕まえろ！」

ネギが相手の女の隙を見て魔法を使う

「ああつしまつた！？ガキを忘れてたー」

「もう遅いです魔法の射手戒めの風矢！！」

ネギから魔法の矢が飛ぶ

「あひこつね助け」「

女は抱えていた木乃香を櫛にする

それに気づいたネギは

「あつ、曲がれ！…」

魔法の矢を曲げた

「うー、このかわんをはなしてください…卑怯ですか？」

やれやれじり貧ですね

介入しますか…

「うー、このかわんをどうするつもつなのよ……」

アスナが女人に聞く

「せやなーまずは呪薬と呪符でも使て口を開んよにして上手いこ

「…」  
ヒカルの言つ口ト聞く操り人形にするのがえーなクックク…

「油断し過ぎですよ貴女」

そう言つて私はエクスカリバーを女の首に当たた

「い、こいつの間に」

「あーあなたは…？」

「…アルト（さん）！？」

「ふう、夜中に出歩くのは感心しないですよ。ネギ先生」

ちよつとからかう積もりで聞いてみる

「アウシ！いや、これは…」

ネギ先生は慌てますか…

「クスッ。冗談ですよネギ先生。状況位は把握しています。」

女から注意は剃らしませんけどね

「あんた何をやつてんのよー。」

アスナが聞いてきた

「見ての通りですけど？」

「ただ腕を前につきだしている様にしか見えませんよ」

刹那が言つてくる

ああ確かに端から見たらそうかも知れませんね

「そうですか、なら…… 風よ」

今まで見えなかつた剣がその言葉をきつかけに徐々に姿を表す。

「「「「なつー?」」「」」

そこには光輝く剣が現れる

「ではこのかさんをはなしてください。」

剣を首もとに突きつけながら齧す

「クッ、仕方ないわ。ここは引くで。」

そう言つて神鳴流の剣士と共に女は去つて行つた

「ふう、ではネギ先生このかさんを任せましたよ。」

そのまま去りうとする私に桜咲さんが声をかけてきた

「待つてください。アルトリアさんは魔法使いなんですか？」

刹那とアスナも同じ事を思ったのかこっちを見てきた。

「ええ、一応魔法使いというカテゴリーには入るかと……とりあえず眠いので私は帰ります。何か聞きたい事があれば明日にしてください。」

そう言つて私は旅館に帰つて寝ました

## 修学旅行 その1（後書き）

すみません。

駄文で……

こんななんでもまあ楽しかったよーー！

って言う人がいたら嬉しいです。

## 修学旅行 その2（前書き）

2日目です。

正直アルトリアは傍観者ですね。

## 修学旅行 その2

## 次の日の朝

大部屋

「それでは麻帆良中の皆さん」

「 いたださまゆ」

ネギ先生の掛け声で

「 いただかね～す」

クラス全員が朝食を食べ始める

朝食が始まつてすぐ刹那が近づいてきた

「アルトリアさん。昨日の話なんですか……」

「なんですか？」

「あなたは敵ですか？」

多少の殺気を込めて睨まれる

「あなたたちの敵ではないですよ……」

少し笑いながら答える

「ナリですか。なら昨日は何故ついてきたんですか？」

多少殺氣は消えたもののまだ睨まれている

私は苦笑いになりながら

「クラスメイトがあんな夜遅くに出てこったんですよ。心配するで  
しょう」

本当はエヴァに頼まれたからですが

「なんか……誤魔化そうとしてませんか？」

田を組めながら疑るよつてひづけを見る

そんなに分かりやすいですかね？

「……あ、せつちゃん」

じぱりくわのままでこるとかが刹那に声をかけた

「……」

すると刹那は焦った様に隣からお膳を持って立ち上がり逃げるよつて離れる

「あんつ何で！？恥ずかしがらんと一緒に食べよー」

刹那はお膳を持って逃げ出した

しかし、それをこのかは追いかける

「せつちゃん何で逃げるん　」

「わ、私は別に　」

落ち着いて朝食も食べれませんね……

それでも自分のペースでのんびり食べ続け

食べ終わったのは一番最後だった

その後ロビーに行くとクラスの皆がネギ先生に今日の自由時間を一緒に過ごさないかと声をかけていた。

そのなかで、のどかがネギ先生に

「よ、ようしければ今日の自由行動…私たちと一緒に回りませんか

ー?」

するとともみくわやにされていたネギ先生が

「わかりました富崎さんー今日は僕富崎さんの五班と回ります。」

ネギ先生と一緒にですか……

ま、良いでしょう

## 奈良公園

「スゴイスゴイ見てくださいアスナさん、わあっ！」

鹿に手を噛まれるネギ先生

可愛いですね

「今のところおサルのお姉さんは来ませんね」

「うーん……」

「おそらく今日は大丈夫だと思いますが……念のため各班に式神を放つておきました何かあればわかります」

「このかお嬢様のことも影からしつかりお守りしますので　お二人は修学旅行を楽しんでください」

の様な会話をアスナ達がしてますね

そういう会話は聞こえないようにやつたほうが良いですよ。

するといきなり後ろから

「「アスナアスナー一緒に大仏見よーよー。」

のどか以外の図書部のメンバーがやって来てアスナを連れて行った

刹那の方は

「せつちゃんお団子買ってきた一緒に食べへん？」

このから走つて逃げて行つた

「あれ？」

ネギ先生が一人になつたところに

緊張したよつた様子ののどかが来た

なるほど、なんかついていくとお邪魔に成りそうですね

適当に時間を潰しますか

あ、そつ言えば奈良なら美味しい甘いものがありそうですね

自由行動の時間でここに面まじょう

甘味屋に行って土産物を買って帰るつとする

ネギ先生を背負つたアスナ達に出会つた

「何をやつてゐんですか？」

「アルト……いや、これは……」

「知恵熱を出して倒れました」

ユエが説明してくれる

「アルト君はなにしてたん？」

「このかが聞いてきたので

「甘味屋をいろいろ回つてました。さすが奈良ですね美味しいものがいっぱいです。」

笑顔でそう言つと

「　　「　　「　　「　　」　　」　　」

ネギ先生以外の皆が顔を赤く染めました

なぜでしょ？

そして皆で旅館に帰りました

その夜

「ええ～～～っ！？ま、魔法がバレた！？」

急にアスナの声が聞こえる

そんな大声で魔法なんて単語行つていいんですか？

注意をしようとした近づいてきた行くと朝倉がネギ先生達に近付いていく

魔法バレた相手って朝倉？

ネギ先生、終わりましたね

「うわつあ、朝倉さん！？」

「ちょっと朝倉あんまり子供いじめんじゃないわよ」

アスナが声をかける

「イジメ？何言つてんのよーかあんたの方がガキ嫌いじやなか  
つたつけ？」

朝倉の肩に力モが乗つているのが見えますね

「そうそう！」のパンヤの姉さんは俺らの味方なんだぜ

「え……？味方？」

ネギ先生が呟く

「報道部突撃班朝倉和美力モッちの熱意にほだされて……ネギ先生の秘密を守るエージェントとして協力していくことにしたよ。よろしくね」

うわあ、怪しいですね

「え、えーーー？本当ですか！？」

ネギ先生は信じたようです

「今まで集めた証拠写真も返してあげる」

「よかつた問題が一つ減りました」

「よしよしネギよかつたね」

まあ、大丈夫でしょう

さでもうすぐ就寝時間ですね。

部屋に戻りましょ

そうして私の2日目の夜は終わりました。

大掛かりなゲームが催してあるのも知らずに

## 修学旅行 その3（前書き）

修学旅行 その3

なんかアルトリアがヒロインに感じてきた……

主人公ですかうね！！

## 修学旅行 その3

朝食を食べているとクラスの女子達がのどかに集まっています。

のどかの手には一枚のカードがありますね

なんでしょう？まき絵辺りなら知つて居そうですね

「まき絵、のどかの持つているあのカードはなんですか？」

「え？アルトくん知らないの」

以外そうな顔で聞き返してきた

「ええ」

「あれはね昨日の夜にやつたゲームの商品なんだよ。で、そのゲームで優勝したのが本屋ちゃんなの」

なんて会話をしているとしづな先生が

「はいはい皆さん今日三日目は完全自由行動日よ。部屋に戻つて準備してねー」

「　　ハーヴ　　」

そしてクラスの皆が部屋に戻つて行く

私服に着替えてどこか行きましょうかね？

そうして部屋に戻つて修学旅行の着替えが入つて いるバッグを見る  
と手紙が入つていた

なんでしょう？

『アルトお前がこの手紙を見るとときは私服に着替える時だろつ。だから私からこの服はプレゼントだ。お前の用意していたズボンとかは全部出して置いたからそのバッグには入つて無いからな。諦めてそれを着るが良い。エヴァ』

そう言つて中を見ると

黒いゴスロリ服しか入つて無かつた

仕方がない。

着替えるか……

そつして外に出ると

すぐに朝倉たちに見つかった

「アルト、あんた何を着てるのー?」

「……見ての通りです」

「あたしが聞きたいのは何でアルトがそんなゴスロリ服を着てるのか?って事なんだけど」

「今私服がこれしか無いんです。エヴァのせいです……」

「そう言えばアルトとエヴァちゃん仲良いよね。なに、付き合ってるの?」

録音機片手に聞いてきた

「エヴァはただの恩人ですよ

「なあーんだ、(帰つたらエヴァちゃんに聞いてみよ。)」

すると他のにも声をかけられた

「あら似合つてゐるわね

千鶴までこるとま

マズイ

千鶴は苦手だ。

「……では私はこの服だから今日は旅館に一日こもるので行っちゃ  
っしゃい」

やつ言ひてその場を離脱しようとしたのだが

ガシツ

肩を捕まる

「……離してくだわよ千鶴」

「イ・ヤー・アルトリア君は今日や定無このよな

「まあ、一応無こですね？」

戦闘離脱（戦闘じゃないが）のスキルが役にたたないとほ

やはり千鶴は恐ろしき……

「私たち今日シネマ村に行くんだけど一緒に行きましょうっ！」

疑問系だが有無を言わせない何かが込められてこる。

「…………」

そうして私はシネマ村に向かうことになった。

シネマ村

「ここに来たら最初にやるべき一歩……」

朝倉がテンションを上げて言った

「何をやるんですか？」

いいんちゅが朝倉に聞くと

「変装だよ変装」

「女物はこやですよ？」

「ここに来るまでこもつ二回ナンパされました。

しかも私が……

三回のナンパ中、一回は断つたらちゃんとひいてくれたんですが、一組が最悪でしたね。

路地裏に連れて行かれそうになりましたもん

まあ、筋力Cなので軽く投げ飛ばしましたが……

「え？ 何を言いつてるのアルトあんたが着るのは決まってるよ。」

え？

「来る途中に千鶴と相談しながら来たからね。その時に決まった。」

「ええ。アルト君は西洋のお姫様よ。」

「い、イヤアアアアア！……」

走つて逃げようとしますが

ガシツ

また肩を捕まれました

「イヤ、離して……文物は着たくない……」

「じゃ、よろしくお願ひします。」

やがて店員に押し付けられた私である

三十分後

漸くメイクと着替えが終わって出ていくと朝倉たちはもう居なかつた

やれやれ。

適当に見て回るとしますか

やつして回り始めると

他の中学生に声をかけられる

「すいません。写真撮つても良いですか？」

「ええ。構いませんよ」

「じゃあ、すみませんが、こちらの美少年剣士の方たちと一緒に」

そう言われて見てみた先には

変装した刹那といのかがいた

「「…………」」

私と刹那は無言になつたが

「うわつアルト君似合つとるなあ

」のががそつ言つてわだ。

「…………ありがとうじゃこめす」

一応お礼を言つておく

「撮りまーす。」

「せり、せつちゃんもアルト君もポーズ！」

「え？」

慌ててポーズを取る私と刹那

刹那は片手でこのかを抱きこのかはそれに抱かれる

私はそんな刹那を後ろから抱き着くポーズを撮った

「――――」

「ありがとーいざこまーす」

中学生達がお礼を言つ

「えへへせつちゃん男の子見たいいやしアルト君は女の子見たいいやし  
ウチらせつちゃんに手を出された女の子見たいに見えるかもなあ

」

「なつ……何を言い出すんですかお嬢様！？」

「その割にはノリノリにポーズ取つてましたよね」

「アルトさん……」

「フフ、【冗談ですよ。ひとつ、すいません今のが『真』データ貰えませんか？】

せっかく撮つたんだし貰つていい

「あ、私も」

「あーせつやんワチモー」

せつじてると馬車が急に来て横に停止した

「ひゃあつ」

「お……お前は！？」

「どうも 神鳴流です じゃなかつたです……そこ東の洋館のお金持ちの貴婦人にござります そこな剣士はん今日こそ借金のかたに一人のお姫様をもう一つ受けに来ましたえ 」

そつ言つて先日にこのかを拐つた仲間の一人  
神鳴流剣士 月詠が現れる  
こんな人混みの中で

「な……何? 何のつもりだこんな場所で」

「せつちゃんこれ劇や劇お芝居や」

このかがボソツと呟く

「（なるほど劇に見せかけて衆人監視の中このかを連れ去ろうとしているのですね）って二人のお姫様って私もですか！？」

「そりはさせんぞこのかお嬢様は私が守る！」

「キャーせつちゃん格好え　」

このかが刹那の腕に抱きつく

「わ、い、いけませんお嬢様……」

顔を赤くして慌てる刹那

面白そうですね

私も参加してみますか

「刹那格好良いですね！！」

そう言って空いている片方の腕に抱きつく  
そして

「でも……私は守ってくれないんですか？」

「ア、アルトさんー！？何をやっているんですか？／＼／＼／＼

……反応が面白いですね

「そーおすかーほな仕方ありまへんな

手袋を外し

「えーーー」

刹那に投げる月詠

「む……」

「このか様とアルト様をかけて決闘を申し込ませて頂きます

3

0分後場所はシネマ村正門横“日本橋”にて

「（じ）迷惑と思いますけどウチ……手合わせさせて頂きたいんです  
逃げたらあきまへんえ　刹那センパイ」

「（じ）迷惑と思いますけどウチ……手合わせさせて頂きたいんです

逃げたらあきまへんえ　刹那センパイ」

やつぱり殺氣をぶつけへる

「ほな、助けを読んでもかまいまへんえ　」

やつぱり馬車に乗つて離れていく

「刹那……行くんですか」

このかに聞こえない様に声をかけないと

「仕方ない……やむしかないだろ?」

ジドードッグ

「ん?」

「わあつーー?」

朝倉達がやつて來た

「ちよつと桜咲さんビーめーー」とよーー?」

「も、何でこんな重要な口づきてくれなかつたの?」

「それでそれで三人はどんな関係なのー?」

「今の子は何!? センパイとか言つてたけどもしかして昔の女...とか、キヤーそつか桜咲さんもこのかも確か出身京都だもんねな

るほど つてやつするトアルト君は「

千鶴 朝倉 パルに矢継ぎ早に質問される

「ちょちょ、ちょつと待ってください。皆さん何の話をしているんですか！？」

「いやいや、うんお姉さんは応援するよ。『記事にするとか野暮は言わないから安心してって』

「私たち味方だからね桜咲さん！…」

「いいよねみんな？よーし決めた！…」

「三人の恋私たちが全力で応援するよ！…」

「わああ！？ちょちょ違うんで待って皆さん つ

「いやあ、大変ですね刹那」

「大変だと思うなら説明してくださいよ！…」

ハツハツハ

千鶴がいる時点で私は無力です……

そうして

私、刹那、このか、朝倉、いいんちょ、パル、ユエ、千鶴、村上の九人で日本橋に向かつて行く途中にちっちゃいネギ先生がやって来た

日本橋に着くと

橋の上に月詠が一本の小太刀を持つて待つていた

「ぎょーさん連れてきてくれはっておおきに 楽しくなりそうです  
な 」

「ほな始めましょうかセンパイ……このか様もアルト様も刹那セン  
パイも……ウチのものにして見せますえ 」

月詠が手に持つている小太刀に舌を這わせながらいつ

「……」

「フフフ」

「せ……せっちゃんあの人なんかこわい

き、気をつけて」

「刹那……頼りにしますね」

「……安心してください」のかお嬢様、アルトお嬢様……

そして一歩前に出て私たち一人を庇うよつて

「 何があつても私がお嬢様たちをお守りします。」

「……せ、せつちゃん」

「／＼／＼（格好良いじゃないですか……）」

パチパチ

拍手が起こり始める。

「桜咲さんかっこいいわね。あやか」

「ええ！」

「ウチの部に来てくんないかな 男役で」

ガシツ

いいんちよが刹那の手を握り

「桜咲さん！…お三の方の愛！…感動いたしましたわお力を貸しします！」

「だから違うんですってばいいんぢょ」

「ホホホホそちらの加勢はないのかしら私たち桜咲さんのクラスメートがお相手いたしますわー！」

「いいんぢょや……」

「ツクツク……と言つたか？」の人達は……」

「ハイセンパイ。心得てます　この方たちには私の可愛いペチトがお相手します。ひやつあやこ」「」

月詠の回りの式から妖怪が現れる

回りの観客は

「おおーっスゴイCGだーー！」

「さすがシネマ村アクション」

「」「これは……」

ちつちゅいネギ先生が驚いてます

「ネギ先生！このかお嬢様とアルトを連れて安全な場所へ逃げてください！…」

「え、でも

「見かけだけですがネギ先生を等身大にします」

ボン

「わあ僕は忍者の役ですか

「ひゃあっー？ネギ君いつの間にー！？」

「このかが驚いている

「刹那」

「何ですかアルト」

「さつきのセリフ……格好よかったです。お礼といつてはなんですがこのかは私が守りましょう。だから……怪我しないでくださいよ」

「……ネギ先生がこのかお嬢様を連れて行っちゃいましたよ。だから早くいってください」

「はー。」

ネギ先生を追いかけますか

「ネギ先生」

「わあっ！？ってアルトリアさんですか」

「私も一緒に」

「わかりました」

そうして逃げて行き周りが石に囲まれている扉に入った

「このかさん！」隠れましょ

「おけ」

「いや、ネギ先生このお城……」

つて聞きなさいよー！

階段を上っていく

「なんだか長い上り階段だな」

「あ、ネギ姫部屋やー。」

「よおし」

ガラッ

部屋に入るといの前の女と一人の少年がいた

「よつこわ、このかお嬢様用詠はん上手く追い込んでくれはつたみたいやな。それにそこのお嬢ちゃんも先日は世話になつたなあ。おや? そつちの坊や何でここに? 小太郎が閉じ込めとるはずやのに……ははへん読めましたえ」

少し考える素振りをしながら

「あんた実体ぢやつな。つてことは手も足も出ん役立たずや」

女の後ろに式神が現れる

「ネギ先生! とつあえず! うづ」

一人を連れて上に上つていく

s.i.d.e 刹那

月詠と剣を打ち合つていると観客のほりからざわめきが聞こえた

「アレ見てアレ」

おおつ

「ほりお城の上…あんなとこでも劇が……」

城の上に田を向けてみると角に追い詰められた三人が見えた

「お嬢様！？」

「あら、よそ見はあきまへんえ」

「ぐつ」

「まづは」こつを何とかしないと

アルト

頼みましたよ……

side out

角に追い詰められた私たち

「きーとるかお嬢様の護衛桜咲刹那、この鬼の矢が三人をピタリと狙つとるのが見えるやろ！」

女の横では式神の鬼が弓に矢をつがえ構えている

「お嬢様の身を案じるなら手は出せんとき……」

それから声を小さくして私たちにしか聞こえないようになります

「フフ……ネギ言つたか坊や？ 一步でも動いたら射たせてもらいますえ」

「さあ、おとなしくお嬢様を渡してもうおか」

「ネギ君こ、これもCG……とちぢゅうよね……やつぱ」

不安そうに「このかがいい

「あの、すいませんこのかわん……」

「ネギ先生大丈夫ですよ。刹那が何があつても守るって言つたんで  
す。必ず刹那が助けてくれますよ。ね、このか」

「うんー。」

「うう…このかわん、アルトリアさん」

「何グズグズ言つてるんや早いとこお嬢様を……」

強い風が吹く

「ひやー」

「ううのかわん」

ネギ先生がこのかを支えるために動く

すると式神が矢を放つ

「あーっ！？何で撃つんやーっ。お嬢様死なれたら困るやん」

「クッ」

ネギ先生が前に出て私たちを庇つように手を出しますが実体ではないため貫通する

「 ッ」

このかを庇い前にでてエクスカリバーを構え弾けじつとすると

ダンッ

刹那が急いでてきて私を庇つように矢を受けました

すると勢いが止まらないのか城の屋根の上から落ちてしまいました

「 わりやーん！」

このかも刹那を追い掛けるように飛び降り

「危ない」

気付いた時にはもう体が動いてました

私も一人に続く様に飛び降ります

空中で二人に追いつくと一人を抱き締めます

するところから魔力の反応が

カツ

辺り一面が光に包まれ私たち三人はこのかの魔力で城の周りの池に立っている

刹那の肩に刺さっていた矢が抜け傷を治す

「あつ、せつちゃん……よかつた」

「刹那、大丈夫ですか？」

「お……お嬢様……アルト……」

タンツ

石垣の上まで移動する

「傷がない？」

「アルト……お前が治してくれたのか？」

「いーえ、私じゃありませんよ」

「ではーーーむ……お嬢様チカラをお使いに」……？

「ウ、ウチ今何やつたん？夢中で……」

すみとひつひやこネギ先生がやつて來た

「刹那さん」

「ネギ先生」

「敵の数も多こい」は一度落ち合おひざ

カモがそつ提案する

「そ……そつですね」

何か迷ったような顔をして

ガバッ

このかをお姫様抱っこする

「お嬢様、今からお嬢様の実家へ参りましょう。神楽坂さん達と  
合流します!」

「え……」

二人はこの家の家に行くらしいですね

「アルトさんもね」

「え?」

声をかけられるとは思いませんでした

顔に出ていたのか

「言ひたでしょ、何があつても私がお嬢様たりをお守りします  
つてアルトお嬢様」

「／＼＼＼からかつてるんですか、私は男ですよ。」

「ええ、先ほど困つていたところを見捨てられたので」

「では、か弱い私は格好いい武士に守られるとしますかね」

「ええ、もちろん」

「でも、私も守りますからね」

「何をですか？」

「あなたとこのかを」

「／＼＼＼ええ、よろしくお願ひします」

「「フ、フフフ」」

「二人とも～ウチがおる」と忘れてへんか?」

「／＼／＼すいません!」のかお嬢様」

「別にええよ

フフフ  
さて頑張りますかね

## 修学旅行 その3（後書き）

感想やアドバイスをくださいると嬉しいです。

あと誤字、脱字などもありましたら教えてください

雑談や質問もあれば書いてください

答えますんで

## 修学旅行 その4（前書き）

アルトリアのセリフ少なっ！！

つて思いますが読んで見てください

## 修学旅行 その4

シネマ村

「着替え終わりましたか?」

「うんせつわやん」

「はい。」

「 「 ..... 」 」

「...なんですかその用は  
予想はできますが

「アルト君の私服かわええなあ」

「.....趣味か?」

「断じて違う...」

「さてそれでは行きますか

「刹那、なぜ田を合わせないのですか?」

返事をせずにこのかを抱き抱え外に飛び出す

「やれやれ」

セツコヒロのかの実家に向かつてこきあと少しで着くといふ……

「おーい桜咲さん！」

シネマ村で別れた朝倉達がいた

「なぜうるさい？」

「いや～、ダメンねえ。桜咲さんの荷物にGABA携帯入れてあるんだ

「…………二つの間に」

「まあいいまで来ひやつたんだし連れてってよ

バルが囁つ

しうがないので連れて行くことになりました

それから歩くこと五分

ネギ先生達が見えた

「おーいアスナー」

このかが声をかける

すると此方に気付いた様だ

それから歸でこのかの実家に歩いて向かう途中

「ちよつと桜咲さんと一緒に来てるの？」

小声でアスナが聞いてきた

「いえ、それがその…私とアルトはお嬢様を連れてこじまで走つて  
たどり着いたのですが……」

「今せつせんじで朝倉たちに捕まつてしまつたんですよ」

「んふふ。私から逃げようなんて百年早いよ」

なぜ追い付いたのか説明をし

「つて訳よ」

「ちよつと朝倉！ 桜咲さんも桜咲さんよ！」

「朝倉あんたこの危険を全然わかつてないでしょ？ ネギなんかさつ  
き死ぬといひだつたのよー？」

なんて会話をしているとパル達が

「あ、見てみてあれ、入り口じゃない？」

「レッシィローー！」

走り出さうのかとユエとパルにのびか

「あーっちょっとみんな！そ、そこは敵の本拠地なのよー？」

「何が出てくるか

構えるネギとアスナ

門の内側に入ると

「「「お帰りなさいませ」」」」」」

沢山の巫女さんがいた

「「「？」」」

## 呆けるネギとアスナ

「「ひひひやーこれみんな」」のかのお屋敷の人？」

バルが驚いている

「や、桜咲さんこれってどーゆー……」

私も気になりますね

「えーと、つまりその、「」は関西呪術協会の総本山であると同時に、「」のかお嬢様の「」実家でもあるのです」

「「ええ つー?」」

初耳ですね

「それ初耳よ何で先に言つてくれなかつたの」

「すいませんっ…………今「」実家に近付くとお嬢様が危険だと思つて  
いたのですが……シネマ村ではそれが裏目に出てしまつたようです  
ね」

「『』実家……総本山に入つてしまえば安全です」

「やつか、『』が『』のかの実家かー」

そんなことを言つたアスナに不安が合つたのか『』のかが

「アスナ……ウチの実家おつきくてひいた?」

「え? うつとつ……ちょっとビビックリしたけどね……いいんちょで慣れてるし……」

そのあと巫女さんに大広間に案内され

西の長が現れた

「よつこもアスナ君』のかのクラスメイトの皆さん、そして担任のネギ先生」

「お父様久しぶりやー」

「はは、これこれこのか」

「「」のかさんのお父さんが西の長だつたんだ」

ネギ先生が呟くと

バル達が

「「」んなお屋敷に住んでる割りに普通の人だね」

「てゆーかちよつと顔色悪い感じだけど」

するとアスナが

「渋くてステキかも……」

アスナの趣味はわかりません

「あ、あの長さん」れを

ポケットから新書を出す

「東の長、麻帆良学園学園長近衛近右衛門から、西の長への新書で  
すお受け取りください」

やつ語つて新書を渡すネギ先生

中島を見た西の長は若干苦笑いになつつつも

「…………いいでしょ。東の長の意を汲み私達東西の仲違いの解消に尽力するをお伝えください。任務御苦労！－ネギ・スプリングフィールド君」

「ハイ！－！」

「おー何かわからんないけどおめでとう先生」

朝倉たちが労う

すると西の長が

「今から口を降りると口が暮れてしまします。君たちも今日は止まつていくといいでしょ。歓迎の宴を用意致しますよ」

「やつたあ！－！」

朝倉たちが喜ぶ

私も疲れましたし

少しのんびりしたいですね

そして宴が始まった

宴が始まり暫くすると横に座っていた刹那に西の長が声をかける

「刹那君」

「ハ」「これは長。私のような者にお話を」

「ハハ……そつかしきまらないでください。昔からそうですね君は……この一年間このかの護衛ありがとうございます。私の個人的な頼みに応えよく頑張つてくれました。苦労をかけましたね」

「ハツ……いえ、お嬢様の護衛は元より私の望み、なれば……もつたないお言葉です。しかし、申し訳ありません。私は結局今日お嬢様に……」

「話は聞きました。このかが力を使つたそうですね」

「ハイ。重傷のハズの私の傷を完全に治癒する程のお力です。」

「…それで剎那君が大事に至らなかつたのならむしろ幸いでした。」

西の長はまるで父親のよつた雰囲氣で剎那に声をかけているが

「西の長さん。私が魔法関係者じゃなかつたらビデオするんですか? そんな簡単にこのかが力を使つたなどと言つて……」

「いえ、剎那君があなたがいるのに話に応じてくれた。これであなたが魔法関係者と言つのはわかりますよ」

へえ、刹那のこと可信頼しているんですね

すると西の長はネギ先生の方に向いて

「このかの力のきつかけは君との仮契約かな? ネギ君」

「おや、ほへは…」

「えー?」

ネギ先生は酷く慌て

「あへ、えつ！？何で知つて……そ、そ、そつなんですかー？あの  
僕つ……す、す、すいませつ」

「ハハハいいのですよネギ君。このかには普通の女の子として生活  
してもらいたいと思い秘密にしてきましたが……いずれにせよこうな  
る日は来たのかもしれません。刹那君君の口からそれとなくこのか  
に伝えてあげてもらえますか」

「長……」

side 刹那

あれから暫くして私とアスナさんはお風呂に入つている

「ふいーっ今日は色々あつて汗かいたからサッパリする~」

「フフ……疲れもしつかり洗い流してくださいね。」

「こじても広いお風呂よねーお匂敷の広さにもおどりこたけびやーあれ……？」のかのお父さんが関西呪術協会の長つて」とは……えーと、つまつこのかは……」

「あ、それはあの……」

「あ、それより聞いたわよーシネマ村でこのかとアルトのこと身を挺して守つたんだつてね。何か刹那さんつてお姫様を守る騎士つて感じだよねーただのボディーガードつて関係じやないつてゆーか」

「なつそそそそんな関係じやありませんよつ

「そーゆー神楽坂さんはどうなんですか。神楽坂さんがネギ先生にあんなに一所懸命協力するのはちょっとおかしいです

「なつ何の話してんのよ

「一般人の神楽坂さんがあんな危険な田にあつてまだ協力するなんて」

「ちがつ……だつてあこつガキだし心配で」

「私もお嬢様が心配なだけですーつ

なぜ私はこんな不毛な言い争いをしているのだらう

「あの神楽坂さん実は」

「あーあの…何か…アスナでいいよ私」

「あ、そうですねじやあ私も刹那で……あのアスナさん色々と話したいことがあるので……あとでこのかお嬢様と一緒にこのお風呂場に来て頂けますか?」

「え?うんいいナビ……」

「ハハハハ」

脱衣場から声が聞こえる

「しかし10歳で先生とはやはりスゴイ」

「いや、そんな」

「いや、十分スゴイですよ」

アスナさんと小声で

「あの声はネギとアルトといのかのお父さん…?」

「なつむいしましょうアスナさん」

そして近くの部屋に隠れた

ガラッ

三人が入ってくる

「「」のかの」とよろしくお願いしますよ。ネギ先生アルトリア君」

「はい、わかりました」

「ええ」

「せ、刹那さん何で隠れてもんの私達」

「すいません。つい、いつものクセがでて…」

長の話し声が聞こえる

「「」の度はウチのものたちが迷惑をかけてしまい申し訳ありません。

昔から東を快く思わない人はいたのですが… 今回は実際に動いた者が少人数で良かった。後のことばは私達に任せてくれ。あいにくどこも人手不足で腕の立つ者は仕事で西日本全域に出払っているんです…… 明日の昼には各地から腕利きの部下たちが戻りますので奴らを捕まえますよ」

「は、はい！ それで…… あのお猿のお姉さんの目的は何だったんですか？」

「お猿の…… 天ヶ崎千草のコトですか…… 彼女には色々と西洋魔術師に対する恨みのようなものがあつて…… いや困ったものです」

「なぜ、このかを狙うんですか？」

アルトが聞く

「切り札が欲しいのでしょうか？」

「切り札？」

「ええ、一人とも薄々お気づきとは思いますが…… やん」となき血脉を代々受け継ぐこのには凄まじい呪力…… 魔力を操る力が眠っています。その力はネギ君のお父さんサウザントマスターをもしひぐ程です。つまり、この力はとてもない力を持つた魔法使いなのです。その力を上手く利用すれば西を乗っ取るどころか東を討つことも容易いと考えたのでしきつ」

「ですから」のかを守るために安全な麻帆良学園に住まわせ」のか自身にもそれを秘密にして来たのですが…」

「へえ、やうなんですか」

「あ、あれ? といひでサウザントマスターの『トトを』存知なんですか?」

「君のお父さんのことですか? フフよく存じてますよ。何しろ私はあのバカ…ナギ・スプリングフィールドとは腐れ縁の友人でしたからね。」

「え……?」

「ですからシネマ村の一件はどう見ても不可思議なのです…」

「だからもうCGだつてばCG。ワイヤーアクション」

「私をこのかさんと一緒にしないでください」

「おやおや!」婦人方が…「これはいけませんね…」案内を間違えたか

な？緊急事態ですネギ君アルト君！裏口から脱出しますよー。」

「えつ？ 騰さん！？」

「いじりにち来たわよゼーすんの！？」

「ビビビーと言われてもつ」

後ろから何かにぶつかられた。

「イタタタ」

胸に違和感を覚えて目を開けるとアルトがひとの胸を驚撃みにしていた

隣ではアスナさんがネギ先生に……

「／＼／＼／ツ！…す、すいません刹那」

「／＼／＼いえ、事故ですし……それより早く手をどけてもらひて

……」

ガラツ

「朝倉さん私に何か隠してこないでしょ」「

「ゆえつちはからみ上戸だねえー」

「私は酔つてしませーんつ」

朝倉さんとゴンさんとお嬢様とバルさんとのじかさんに入ってきた。

「ん?」「え?」

「」「あ.....」「」

「キヤーー

「いやーん」

「あわわ

「お父様のヒツチー」

「ハハハ」

「何で男女別じゃ無いんですかー」

「温泉じゃ無いんですから」

一方その頃の旅館では西の長が放つたネギたちの式神を見てクラスメイトは

「なんか今日のアスナとネギ先生変だよねー」

「やつ言えば朝倉とかも田が虚うで……」「

「アルト君なんかまだ『ゴスロリ服来てるよ……』

なんて会話がなされていた

## 修学旅行 その5（前書き）

修学旅行も大分終盤に入つて来ました

## 修学旅行 その5

お風呂上がりにネギ先生と歩いていると

「うーん、このかさんのお父さんがサウザントマスターの友達だつたなんてねー。でも新書も渡したし明日は父さんの住んでた家に案内してくれるって言つてたしー目的は全部果たしたね力モ君」

「おつよ兄貴ー。」

「…………」

終始無言の私が気になつたのか

「どうかしたんですか?」

「いえ、どうも嫌な予感がして……」

その瞬間

「あやああああ

「　「　「　一.二.」　」

「アルトセラ今の一.？」

「悲鳴ですね。多分朝倉達の部屋から」

走つて駆けつける

中止は固まつてこる朝倉とパルとのどかがいた

「あれへ.監さん何してるんですか? 固まつちゃつて何かの遊びですか?」

いやネギ先生遊びであの悲鳴はなこでしょ! ひ……

「　「.」……こればー.」

もつやく固まつてこる」といづくネギ先生

「高等魔術『ベトコビイケーション石化』ですね」

「のどかさんのどかわー.」

「落ち着け兄貴ヤツラだ！！」

「でもみんなが！」

「落ち着きなさいネギ先生石化なら長が解いてくれるでしょう」

「それよりヤツラに備えろ兄貴！」

「でも……総本山にいれば敵は手を出せないハズじゃないの！？」

「来てしまっているんです。仕方ないでしょ？今は現状分析よりやることがあります。」

するとネギ先生は何か思い出したように

「アスナさん……」

かけだした

一人は危ないですよ

カードを頭に当て念話をするネギ先生すると走り出しながら

「杖よ！…」

ネギ先生の手に杖が飛んでくる

あつちは大丈夫でしょう。

私は不穏な力が感じられるあちらの方へ行きますか。

「魔装装着」

服の上から鎧を来て走り出す

そして力の場所には

「おおっ……や、やるやないか新入り！？どうやつて本山の結界を抜いたんや！？最初からお前に任せといたら良かつたわ」

白い少年と千草がいた

気分が乗らなかつたせいかいさか到着するのに時間がかかつたけど……

「ふふ……しかしこれでこのお嬢様は手に入った。あとほお嬢様を連れてあの場所まで行けばウチラの勝ちやな」

「…………」

白い少年のほうが此方を見てきます

気づいてますか

「待ちなさい……」

なりせめて……

ネギ先生たちが来るまでの時間を稼ぎましようかね??

「おや?またあんたか?」

「ええ、その人を返して貰えませんかね?」

「ふふ、無理

「なら仕方がないでしょ。お相手します。」

構えたと同時に

「そこまでだ。お嬢様を離せ……」

刹那たちが現れた

「天ヶ崎千草！！明日の朝にはお前を捕らえに応援が来るぞ。無駄な抵抗はやめ投降するがいい！」

「ふふん……応援がなんぼのもんや。あの場所まで行きさえすれば……それよりも」

千草が近づいてくる

「あんたらにもお嬢様の力の一端を見せたるわ。本山でガタガタ震えてれば良かつたと後悔するで……お嬢様失礼を」

そう言つてこのかにお札をはる

このかの魔力を使って

「オン」

「キリキリ、ヴァジャラウーンハッタ」

詠唱をすると周りから沢山の鬼を召喚する

「ちょっとひょっとこんなのありなのー?」

「ヤロー!」のか姉さんの魔力で手当たり次第に召喚しやがったな

「ひや百体ぐらい軽くいるよ」

「あんたらにはその鬼どもと遊んでもらおか。ま、ガキやし殺さんよーに。だけ、は言つとくわ安心しちゃ。ほな」

そう言つて一人は飛んでいった

「ま、待て」

「刹那!落ち着きなさい」

「クウッ」

周りを鬼たちに囲まれる

「何や何や。久々に呼ばれた思つたら……相手はおぼこじ嬢ちゃん坊っちゃんかいな」

「悪いな嬢ちゃん達呼ばれたからには手加減できんのや。恨まんといてな」

「刹那さん」んなの……さすがに私

「アスナさん落ち着いて……大丈夫です！」

「ネギ先生。時間が欲しいので障壁を」

「はい、ラス・テルマ・スキル・マギスキル逆巻き春の風我らに風の加護を”風花旋風風障壁”」

私たちを囲むように竜巻が起きる

「これってーー？」

「風の障壁ですただし、3分しか持ちません」

「よし手短に作戦立てよつぜーー。どうするこつはかなりまずい状況だーー。」

カモが提案すると刹那が

「……」「手にわかる」「これしかありません」

「私が一人でここに残り鬼達を引き付けます。その間に三人はお嬢様を追つてください」

「ええっ」

「そんな刹那さんっ」

「任せてくださいああいつ化け物を退治調伏するのが元々私の仕事ですから」

「でもそんなっ、じゃあ私も一緒に残る——！」

「「「ええっ」」

「アスナさんっ」

「刹那さんをこんなところに一人で残していけないよ

「いや……待てよ案外いい手かも知れねえ！どうやら姉さんのハリセンは叩くだけで召喚された化け物を送り返しちまう代物だ！あの

鬼達を相手にやるにや 最適だぜーー？」

「へえ、そんな効果があるんですかそのハリセン」

「よし、鬼どもは姉さんと刹那の姉さんにアルトの田那が引き付け  
ておくーー兄貴は一撃離脱でこのか姉さんを奪取ーーあとは全力で  
逃げて本山に向かっている援軍を待てば良いつて寸法だーーどうだ  
！？」

「やつ上手く行きますか？」

「分の悪い賭けだけどな……だが他に代案があるか？」

でない

「わかりましたそれでいきましょ」

「決まりだなーーー」

「よし、やつとなつたらアレやつといひせーー」

「アレやつ

アスナが嫌な顔してカモに聞く

「キスだよキス！仮契約」

「「えええつーー？」」

「緊急事態だーー手札は多いほうがいいだろ？がよおーー」

そして魔方陣を書くカモ

「すいませんネギ先生」

「いえ、ひづらひづら」

口づけをする

なんかムカつきますね。ネギ先生が

「先生……」のかお嬢様を……頼みます！」

「ハイツ」

「見つめあに遇<sup>ハシ</sup>でや」

間に割り込む

あるとカモが一<sup>ヒ</sup>ヤ一<sup>ヒ</sup>ヤしながらいつしか見る

「何ですか？」

「いやあ、すいませんね<sup>ハシ</sup>那<sup>ハシ</sup>！兄貴が……」

「風がやむー来るわよ」

アスナの声に会話が途切れる

「雷の暴風ーー！」

風が途切れた瞬間ネギ先生が魔法を放ち飛びだす

「落ち着いて戦えば大丈夫ですー見た目ほど恐<sup>ハシ</sup>い敵じゃあります。私のこの剣もアスナさんのハリセンも……そう言え<sup>ハシ</sup>ばアルトの武器つて剣なんですか？」

今さら？

「やつですよ」

「せいぜい街でチンピラ百人に囲まれた程度だと考えてください」

「楽勝ですね」

「アルト基準で考えないでよー。」

「こつは」こつは勇ましくお嬢ちゃん達やな

鬼が言つ

「しょーがないわね」

「それでは、鬼退治とこきましようかーー！」

「はーー。」

そつして戦いが始まった。

戦いが始まつて少しつと

「「」のおー。」

アスナがどんどん鬼をハリセンで返して行く

「これで10匹目……私ってば強いかも……」

それからもどんどん返して行くアスナ

「「」のガキ！！」

「やつちまえいっ！！」

鬼達が数人一辺に襲い掛かる

「わ

だが

「神鳴流奥義……」

影から刹那が現れ

「百烈桜花斬」

力バーをする

「ありがと刹那さん、いけそっだよーーー。」

「ええ」

すると二人の後ろから鬼が一人現れる

「やれやれ、油断しすぎですね。」

一太刀で鬼を切り捨てる

「アルトーーー！」

「行きますよーーー！アスナは左刹那は右を……」

「ハイツ  
「OK」

「でええいーーー！」

「おおおーーー！」

「やああーーー！」

ドカアツ

周りの鬼達を吹き飛ばし背中合せになる

「結構……いいコンビかもね私たち」

「ふふつ」

「全く……」

「修学旅行帰つたら剣道教えてよ刹那さん」

「良いですね。手合わせしましょうか刹那

「えついいんですけど……私もまだ未熟なので……ってアルトさんは  
私に剣を教えてくださいよ！私たち一人より遙かに鬼を消してゐるじ  
やないですか！－！」

そんな軽口を叩いていると

「ひや……百五十体の兵が3分で半ばまでも……」

「ぐあつは一天敵の神鳴流はともかくあの嬢ちゃんのハリセンは反則だしあつちの西洋の騎士の嬢ちゃんは力が違に過ぎますぜオヤビン」

「ぐわははは元気のいい娘つ子達やな……とこりで、すかあとのじたに肌着を着けへんのが最近の流行りなんかいな?」

アスナはその言葉を聞いてスカートをおさえる

つてなぜ下着を着けて無いんですかアスナ!!

「お、動きが遅くなつたで引っ捕らえい」

「何でいつもこんな役!?」

スカートを押さえながら逃げ回るアスナ

やれやれ

助けますか



**修学旅行 その5（後書き）**

感想や誤字、脱字があつたら教えてください。

## 修学旅行 その6（前書き）

鬼神クスナの辺りまで

次回で修学旅行編は終わりの予定

もしかしたらあと一話入るかも……

## 修学旅行 その6

少し時がたち……

「てやあああ！」

「奥義雷鳴剣……」

二人が鬼を倒していく。

「まったく……中学生とは思えませんね。」

「スキありーー！」

鬼が後ろから奇襲をする。

「甘いーー！」

一步後ろに下がり

「エルフインダンスーー！」

前に踏み込んで斬る

ドサッ

鬼が倒れる

「やれやれ……」

「大丈夫ですかアスナさん」

肩で息をしながら聞く刹那

「うん！敵ももう半分以下だよ」

「あまり無理はしないでください」

「貴女もね刹那」

一応声をかけておく

「大丈夫行けるよ。あとはネギがこのかを取り返して戻ってくれば  
……ぎやー？」

アスナの目の前から鳥族の式神が現れて斬りつける

「む……鳥族！？アスナさん！！」

刹那が声をかけるが刹那の前からも式神がくる

「なかなかやるなあ嬢ちゃん。しかし某は今までの奴等とはちと出来が違うぞー！？」

剣で斬りつけながらアスナに警告し持っていた剣の柄でアスナの防御を破る

そして

「え？」

そのまま斬りつける

「あつああ」

「ハツ」

岩に叩きつけられるアスナ

クッ

行こうとする前に鬼達が現れて道をふさぐ

「西洋の嬢ちゃんの相手はワシ」

「わざわざから西洋の嬢ちゃん、嬢ちゃん、私は男ですよ……（しかし）こつらも別格か……アスナ、少し頑張ってください」

すると遠くに光の柱が見える

「あの光の柱は……？」

「どうやら雇い主の千草はんの計画が上手くいったみたいですね  
あの可愛い魔法使い君は間に合わへんかったんやろか。まあウ  
チには関係ありまへんけどなー刹那センパイ」

「う……丹詠……」

「あ……」

鳥族に手首を掴まれるアスナ

「アスナさん……」

「ええい！！」

助けようと動いたのですが……

「おひと……あなたの相手はワシ、サヒルサウ」

鬼達を先にどうにかしなければ……

すると刹那から別の力を感じた

その瞬間

ドショウ

アスナの手首を掴んでいた鳥族の頭が撃ち抜かれる

「ぬおおつしまった新手か！？」

「キッ

ガンツ

「これは術を施された弾丸…………何奴！？」

「…………らしくない苦戦してゐよハジヤないか？」

「え」

「ええつーー？」

なぜここにあの二人が？

「（）の助つ人の仕事料はツケにしてあげるよ刹那」

「うひやーあのデカいの本物アルかー？強そアルねー」

龍宮真名にクーフュですか

ありがたいですね

ガアンガアン

銃声が響く

どんどん鬼達を消していく最中 四人の鳥族が真名達を囲む

「接近戦で鉄砲は使えまい」

真名は足下のギターケースを蹴ると中から二丁の拳銃が出てきて囲んでいた鳥族を撃ち倒す

その様子をみたアスナは

「何で龍宮とはたまに仕事を一緒にする仲で……？」

「龍宮とはたまに仕事を一緒にする仲で……」

「なら最初から声をかけとくべきでしょ」

「いえ、これらひとつおお金がかかりますので……」

「つてクーフェも想像以上に強いですね」

横で鬼達をふつ飛ばしている

それから少し鬼達を減らしつゝると光の柱から鬼神が現れる  
「ネギの奴間にあわなかつたのー?」

「わかりませんでも……」

「助けに行かなれば」

しかしここから邪魔ですね……

「センパイ逃げるんですかあ?」

ドンドンッ

月詠に向かつて銃弾が飛ぶが弾かれる

「行け刹那！－あの可愛らしい先生を助けに－」

「（）は私達に任せんアルよ－－」

「しかし……」

「行きますよ刹那」

腕を掴み連れていく

「アルト！－だけど……」

「あの二人なら大丈夫ですよ－－」

するとアスナと刹那に念話が入ったようです。

「アルトさん、今からネギ先生に召喚されますので捕まつてください！」

言われた瞬間

反射的に手を掴むと足下に魔方陣が現れて景色が変わる

後ろにネギ先生

前には鬼神ですか

それに小さな白い髪の少年

「ヴィシュ・タルリ・シュタルヴァンゲイド小わき王八つ足の蜥蜴  
邪眼の主よ」

「何!? これは呪文始動キー! ?」つい西洋魔術師……しかもこれは……姉さん奴の詠唱を止め

「ダメです間に合わない」

「時を奪う毒の吐息を『石の息吹』

刹那達と共に一時下がる

「なんとか逃げれた奴はまだこっちに気づいてません」

「しかし気づくのは時間の問題ですよ」

「大丈夫ネギ？ひどい死にそつじやん」

「ありがとうございます」

ネギ先生の手が少し石になつてますね

すると刹那が

「……三人共今すぐ逃げてください。お嬢様は私が救い出します！  
お嬢様は千草と共にあの巨人の肩の所にいます。私ならあそこまで  
行けますから」

「でもあんな高い所どうやって」

アスナが聞くと

「ネギ先生アスナさんアルトさん……私……三人にも……このかお嬢  
様にも秘密にしておいたことがあります。」

そこで一回切り

「！」の姿を見られたらもつ……お別れしなくてはなりません。」

「え……」

「でも、今なら。あなた達になら……」

バサツ

刹那の背中から純白の翼が現れた。なるほど先ほど感じたのはこれですか

「……」これが私の正体奴らと同じ…化け物です。でもつ…誤解しないでください。私のお嬢様を守りたいという気持ちは本物です！…今まで秘密にしていたのは…この醜い姿をお嬢様に知られて嫌われるのが怖かつただけ…！私つ…富崎さんのような勇気も持てない情けない女です…」

「……へえ  
「……ふうーん」

アスナと私は刹那の翼をさわると

「ひゃ」

モフツモフツ

サワサワ  
クンクン  
ギュウー

匂いを嗅いだり握ったり抱き締めたりしました

はわあー暖かいです。

するとアスナが刹那の背中を叩き

「なーに言つてんのよ刹那さん。こんなの背中に生えてくんなんて  
カツコイイじゃん」

「え……」

「ほらアラトみてみなよ。凄い幸せな顔してるよ。」

モフモフ幸せ

「あんたさあ……」のかの幼なじみでその後一年間も影からずつと見  
守つてたんだしょ。その間あいつの何を見てたのよ。このかがこの  
位で誰かのことを嫌いになつたりすると思う?ホントにもう……バ  
力なんだから」

「あ……アスナさん……」

「行つて刹那さんー私達が援護するから。いいわよねネギー・アルト！」

「ええ勿論」

「は、ハイ」

「ほり早く刹那さん」

「…………ハイツ！」

バサツ

翼を広げて飛ぶ準備をする刹那

するといきよひど煙が晴れて

「ヤ！」にいたのか

「アルトさん……ネギ先生……このちゃんのために頑張ってくれて  
ありがとうございます」

そつ言つての向かって飛んでいく。

それを落とそうと少年が構えるが

「魔法の射手光の一矢！－  
ネギ先生が阻止する

「さてこれからどうしようか、カモ君」

『……坊や聞こえたか？坊や』

「――！」

この声はエヴァー！？

『フフフ……わずかだか貴様の戦い覗かしてもらつたぞ……まだ限界ではないはずだ坊や意地をみせてみろ！－そこにはアルトリアもいるんだろ？－！ならそいつを中心にあと一分半持ちこたえられたなら私が全てを終わらせてやる！－』

「ネギ先生……行きますよ！－」

「ハイツ」

「OK！－」

「来るのかい？なら……相手をしよう！」

「ハアツー！」

斬りかかる

だが、すぐ後ろに回つしまれる。

だが、

「なめるなあ……」

上体を無理やりひねり蹴りをよけまた斬りかかる。

「甘こむ

それすりもぬけ止められるが……

「アンタもね

アスナがハマノツルギで障壁を一回破壊する。

「へえ」

すぐにアスナを蹴り飛ばしね、ギ先生のまつに飛ばし空中に飛ぶ

「ヴィシュ・タルリ・シュタルヴァンゲイド」

詠唱を開始する

クソッあればヤバイですね

「小走き王八つ足の蜥蜴邪眼の主よ」

「間に合えーーー！」

アスナたちを庇うために走る

「その光我が手に宿し炎いなる眼差して射よ」

鞘を開くと同時に

「ネギ」

アスナはネギを庇つよつて抱きしめ私はアスナを庇つよつて前に出た

「石化の邪眼！！」

魔法が放たれる

「全て遠き理想郷！」  
アヴァロン

鞘の真名を開放する

すると何事も無かつたように魔法が消える

「なに？ 魔法が消えた？ なら……」

そう言って殴りにくる少年

ヤバい！！ 展開するのに咄嗟だった為か魔力を注ぎ過ぎて動けない

「まずは君からだ。アルトリア・ロア」

「クッ」

ガキイイツ

「…」

ネギ先生が私の前で少年の拳を止めている

「アルトリアさん……大丈夫ですか？」

「ネギナイス！イタズラの過ぎるガキには……」

アスナがハマノツルギを振りかぶり

「おしおきよつ…」

バキイイツ

障壁が割れそこには

「兄貴今だ！！」

「つおおお」

ネギ先生のパンチが飛ぶ

「 も…… もつたの？」

「 …… 身体に直接拳を入れられたのは… はじめてだよ。ネギ・スプリングフュールド」

すぐに戻つ返りがあるが

ガシッ

少年の影から手が現れる

「 うひのぼー やが世話になつたよつだな痴鴨」

ドカンシ

湖の真ん中までぶつ飛ばす

「 「 ハガアちゃん（ハガアンジンコンちゃん）……」

「 「 れで借りは無しだなぼー や」

急に湖の中にいた鬼神の周りに結界が張られる

空中を見ると茶々丸がいた

なるほど

彼女なら納得だ

「ぼー やよくやつたよ」

エヴァの周りに蝙蝠が集まりマントとなる

「まだまだだな

「いいか、このような大規模な戦いで魔法使いの役目とは究極的に  
はただの砲台！従者の守る間にでかいのを決める！…つまりは火力  
が全てだ！今から最強の魔法使いの最高の力を見せてやる」

そう言って飛んでいくが空中で止まり

「いいな！よーく見とけよ！私の力を！それとアルト。」

「何ですか？」

「付き合へ。あれを完全に消滅させるからな」

「分かりました。」

風を纏い空を飛ぶ

まずエヴァが

「リク・ラクラ・ラックライラック契約に従い我に従え氷の女王來たれ”とこしみのやみ”えいえんのひょうが”」

鬼神を凍らせる

「次から次へとなんやなんなんやアンタ何者や！？」

エヴァがノリノリに

「くくくく、相手が悪かったなあ女……ほぼ絶対零度150フィート四方の広範囲完全凍結全滅呪文だ。そのデカブツでも防ぐこと叶わぬぞ。我が名は吸血鬼エヴァンジエリン！『闇の福音』！－最強無敵の悪の魔法使いだよ！－アハハハハ」

さうして詠唱する

「全ての命ある者に等しき死を其は安らぎ也」

「な、なあー！」

「おわるせかい フッ……碎ける」

パキィイイン

鬼神が碎ける

後はあれを……

「消滅させる」

「後は任せた」

「ええ、魔力放出」

最大の魔力を

「」の一撃に……」

剣が徐々に姿を表し

そこに居るもの全てがその輝きに魅了される

その剣の名は

「 約束された ≪ エクス ≫ 勝利の剣」カリバ

真名を開放し剣激が放たれ鬼神の身体は消滅した

## 修学旅行 その7（前書き）

すいません。更新が遅れました。

あともしかしたら後一回修学旅行編が入るかも……

「アハハハハ！！バアカめ伝説の鬼神か知らぬが私の敵ではないわー！」

### 高笑いするエヴァ

あれ？最後に決めたの私じゃありませんでしたか？

なに自分一人の手柄にしようとしてるんでしょう？

こつちは魔力が残り少ないので真名開放までやらされたんですよ。

普通お礼があるでしょう。

そんなことを考へて、エヴァがネギ先生のもとに降りていった

「ビーだぼーや私のこの圧倒的な力しかと日に焼きつけたか？ん？」

「すうじよエヴァちゃんやるじやん！最強とか自慢しだけあるわ  
ね見直しちゃった！」

アスナも私を無視ですか……

「アルトも凄かつたよ！…」  
その一言が聞こえた瞬間

ガシツ

アスナのもとに行き手を握つた

「ありがとうございます。アスナ」

「え？ う、うん……」

なんて感動しているとネギ先生が……

「で、でも登校地獄の呪いは？」

「あーそーよ学園の外に出られないんじゃなかつたの？」

「それですが……」

茶々丸が説明する

「協力な呪いの精霊をだまし続けるため、今現在複雑高度な儀式魔

法の上、学園長自らが五秒に一回『エヴァンジェリンの京都行きは学業の一環である』という書類にハンコを絶えず押し続けています。準備に時間がかかってしまい申し訳ありません

頭の中にハンコを書類に押し続いている学園長を思い浮かべ、少し笑つた。

「で、今回の報酬として明日私が京都観光を終えるまで、じじいにはハンコ地獄を続けてもらう。こんな機会もうないからなー。」

「五秒に一回つて……学園長大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないですか？」

少し投げやりに答える

「ふんーこの事件のそもそもの原因はじじいの見通しの甘さにあるー」の程度の苦労当然だ。」

「登校地獄の呪いと学園結界から逃れた今の私の力はほぼ全盛期と同等。反則気味の最強状態といつ訳さ。ふふ……久々に全開でやれて気持ち良かつたよぼーや」

「ならあの鬼神を最後までちやんとやりなさいよ！一只得え少なかつた魔力を大半消費してしまったんですよ。明日は一日寝ていたいです……」

と言ひと

「なに、アルトにも見せ場を作つてやらうつと思つてな……」

ネギ先生の方に

「それといいかぼーや、今回のことを見が暇な時にやつていい日本のテレビゲームに例えるとだな。」

微妙な例えですね……

「最初の方の洞窟とかで死にかけてたらなぜかラスボスが助けに来てくれたようなものだ。次にこんなことが起こつても私の力は期待出来んぞ。そこん所をよく肝に命じておけよ。」

ついそろそろ簽てるネギ先生

「は……はい……？」

何かに気づいたみたいですね。何でしょう？

エヴァの方を見ると後ろに水溜まりがあつた。

「む……さすがにキツそうだなほーや、大丈夫か?」

ズ……

「エヴァ！！」

水溜まりから白い少年が出てくる。あれはヤバいですね。

私はエヴァを抱きしめて庇つ

「なつ何?ちよつアルトー!-/\/\/\」

何顔赤くしてゐるんですか?エヴァ

「障壁突破”石の槍”」

グサッ

「ツ……」

腹を石の槍が貫く。

鎧無視ですか……

痛いですね。

「貴様ツ！！」

エヴァが怒った

「エヴァンジエリンを狙つたつもりだったが……」

「アルトリアさん！－！」

「アルト！－！」

ネギ先生とアスナが声をあげる

「許さん！」

手に魔力を込め放つ

「……成る程、相手が吸血鬼の真祖では分が悪い。今日の所は僕も

退くことにするよ…………

逃げましたか……

それには

「幻想か……」

「そうですねエヴァ」

「アルト大丈夫なのッ！？」

「ええ、大丈夫ですよ。」

腹は痛いですが

「じゃなくて今昔がグサーつてお腹に刺さって血がドバーつて

「ええ、そうですね。まあ治療の道具を持つてますから大丈夫ですよ。」

「よかつた……アルトリアさん」

ネギ先生のほうこそ大丈夫ですか？

アカウント

「ネギ先生！？」

「大丈夫ですか！？」

「シ」と「ヨ」の「た」

一兄貴ツひでえツ右半身が石化を……」

すると遠くから

「ネギくん」

一  
衣  
半  
先  
生  
！

「このかに刹那ですか」

「ネギが！！！」

「アーッたゞ、アーッかー。」

「楓さん…ゴ…」

楓が何でいるの？

茶々丸がネギ先生の容態を見る

「ネギ先生の魔法抵抗力が高すぎるため、石化の進行速度が非常に遅いのです。このままでは首部分まで石化した時点で呼吸ができず窒息してしまいます」

「…………ど、どうにかならなーのエヴァちゃん…」

「わっ…私は治癒系の魔法は苦手なんだよ。不死身だから」

おうおうしながらエヴァが答える

「そんなん……ならアルトは…? わたし治療の道具があるって言ってたよね!!」

「ある」とこれはありますか……今これを渡すと私が死にます。」

出血量で……

「毎に着てつっこつ応援部隊なり治せんだが……間に合わねえ  
ツ」

「お嬢様……」

「うん」

「あんな……アスナ……」

「え？」

「ウチ……ネギ君にチューしてもええ？」

別れのキスですか？

「なつ何書つてんのいいのか、こんな時」「……」

「あわわ、ちやうぢやうあのホラ、パ……パクトナーとかいっやつ  
リヤツ」

「え……」

「みんな……ウチせつちやんに色々聞きました。……ありがと。今  
田せつらんにたくさんのクラスのみんなに助けもひつて……ウチ  
こまくねぐらいしかできひんから……」

「……そつか！仮契約には対象の潜在力を引き出す効果がある。このか姉さんがシネマ村で見せたあの治癒力なら……」

ネギ先生が助かるかもしませんね

「ネギ君…………しつかり」

ネギ先生を中心に光が

「ん…………」のか…………さん？」

ネギ先生が目を覚ました

「よかつた…………無事だつたんですね…………」

「「「ヤツター」「」

皆が喜ぶ

「おや？」

「どうしたアルト？」

「いえエヴァ、ただ私の傷も治っているので……」

そうしてとりあえず総本山に戻った

戻つて一夜あけて

「……朝ですか」

ウーン

体を伸ばし目を覚ます。

すると障子越しに

「従者から連絡が入った。全て解決。主犯は後で引き渡すよ」

「何から何までありがとうございます。エヴァンジョリンさん」

「の壇……刹那にエヴァですか

「ネギ先生とアルトさんはぐつすつとお休みのよつですね。」

「まあハードな一夜だつたからな。だがアルトが寝てゐるのは……私が頼んだ最後の止めのせいだろ。魔力切れで最後戻つて来たら倒れたからな」

「　　おい、もつ行くのか？せめて別れの挨拶くらへ……」

「…………顔を見れば辛くなりますから…………」

やれやれ

「冷たいですね刹那…………」

ガラツ

障子を開けながら言つと

「アルトさん……」

「さん付けですか……刹那、私の呼び方を一定にしてくれませんか？……友達として……」

「…友達…………ですか…………あつがといわざれこまか。アルト

「ええ、さういたしました。」

「では、」

そう言つて去るひとする剎那

するじ

バンツ

後ろの障子が開き

「刹那れそつーーー！」

ネギ先生が現れた

「どうへこつちやうんですかつーーーのかせんばビーあるつもつなんですかつ？」

「い、一応一族の捷ですか……あの姿を見られた以上仕方ないのです……」

「お嬢様を守るという誓いも果たし神鳴流に拾われた私を育ててくれた近衛家へ御恩も返すことができました。あとのことはネギ先生とアルト……よろしくお願ひします」

やつ言い終わると走り出した

「あつ……」

ガバーッ

と抱きつき止めようとするネギ先生

「ダメですよ刹那さん！僕だってみんなに正体バラされたらオロジヨにされちゃうんですから……」

「それにそんなこと言つたりHヴァンジHコンさん吸血鬼だし茶々丸さんも口ボなんですよーーー！」

「マスターお茶が入りました。」

「つむ

「茶々丸私も貰えますか？」

「はい。」

「だから刹那さん自分で」のかさんを「これからもずっと守ってくださいよ……」

「そんな無茶なあなたそれでも先生ですか！？」

「刹那さんに言われたくないです……！」

「そりゃ私だつて去りたくないです……せつかくお嬢様と……」

「じゃあいれば……！アスナさんだつていい友達ができたつて喜んでたの！」

「若いついでいいよな　」

「そうですね」

「イキナリ老け込まないでくださいマスター、アルトさん」

「しかし……」

ああ、まだ言い合つてゐるんですか

T<sub>s</sub> T<sub>v</sub> T<sub>s</sub> T<sub>v</sub> T<sub>s</sub> T<sub>v</sub>

「せつぢやんせつぢやん大変や  
...」

「大変よ刹那さん！！」

「ふざけやー！」

アスナ……」のか……イキナリドロップキックはないでしょうねう……

「なななつ…何事ですか！？」

「実は3-Aの旅館に飛ばした私達の身代わりの紙型が大暴れして  
るらしいのよ」

「えええ  
！」？

……私のもですか？

「おつじじいいたか桜咲、アルト！」

「ネギ坊主ホテル嵐山へ急行するアルよー。」

「荷物の準備できました」「

「ホラ刹那身代わりはお前の専門だろ」

「せつちやんはよー」

「何ボーッとしてんのよネギー」

「…………刹那さん…………僕達黙つてますから…………」

「早く行きますよ刹那」

「……仕方ないですもつ……ありがとうございますネギ先生……アルトさん……」

「…………アルト……さん……？」

「……アルト」

「よろしこ、じやあ行かましょ。」

「わかりました。行きましょうお嬢様！！」

「あんせーがいな。」やけんで呼んで――・・・。」

「えつ……いえそのクセで……すいませつ……」

「ホラ早くあんた達!! 置いてくわよーっ」

「あ、僕着替えがまだ」

「私も、着替えなくては…」

そしてホテルに戻つて行つた

## 修学旅行 その7（後書き）

誤字、脱字、アドバイスが合つたら教えてください

## 修学旅行 その8（前書き）

長いこと放置していくといません……

よひやへ漫画を返して貰えたので早速更新です。

後前の話こりよつと追加をしました。

これで修学旅行編ラストです。

後後書きにアンケートを載せて置いたので答えてくれると嬉しいです。

嵐山のホテルの五班の部屋

「はー、疲れましたねー」

ネギ先生にアスナ、このかに刹那、そしてアルトが寝転がっている

「……でもこりうして嵐山の旅館で寝転がっていると昨日のことって何か夢みたいだね」「

「ふふ……そうですね傷も消えてしまいましたし……アルトはいつまで寝てるんですか?」

「……昨日は魔力を消費しそぎたんですね。」

誰かのせいでの、真名解放を使はめになつたんですから

また、沈黙が続きしばらくなして

「……いい天氣、平和が一番やなー」

「ぐす、ホントね」

チヨン

ネギ先生がアスナの手をさわる

「あ…」

「ん…？」

「……つと、」めんなさこアスナちゃん

「んん？」

「「おラネギ、今さら手触つたくらいで何謝つてんのよ。バカねー  
ガキのくせに裸だつて見てるでしょ」

それを見てこのかは

「へへつウチも」

「わっ?あ、あの!」のちやん?

刹那の手を握る

「……せりちゃんウチのためにいろいろ……ありがとうございます」

「いっ……いえそんな……お嬢様……」

「またお嬢様でゆうべー」

「あ、ごめんなさい……」

肩身が狭いですね……

刹那に抱き着いて見ますか

ギュッ

「／＼／＼／＼！－何をするんですかアルト……」

「ん～？暖かいですね刹那……良く寝れそうですね……」

顔を背中に埋める

「／＼／＼／＼ やん 息が 当たる」

このか達の顔が赤いですね  
まあ良いですか このぬくもり 気持ちいいです

あー、いい感じに眠気が……

バンッ!!

「 ハハ起きるーつーーー もー やとんの他ーーー」

ビクッ

エヴァが急に入ってきた

「 今日は私の京都観光に付き合つがいいーーー」

「ええー 韶さんとの待ち合わせはまだ……」

ネギ先生が反論するが

「だからそれまで観光すんだろホラ起きるー図書館の三人は付き合つてくれるそうだぞーまずは清水寺だー！」

テンション高いですねエヴァ

え？刹那ですか？

エヴァが入つて来た瞬間に腕の中から居なくなりました。

残念です。

とりあえず

「エヴァ、私は寝かせて貰つていいですか？」

「黙れ。反論は許さん。行くぞーー！」

そこから一度目の清水寺に行つた。

そして約束の時間になり長の所に行く

「やあ監さん、休めましたか？」

「どうも、長さん…」

「！」の奥です二階建ての狭い建物ですよ。」

「ねえねえド「行くの？」

「何でもネギ先生の父親の別荘に…」

知らなかつたんですかバル

「長さん……小太郎君は……」

ネギ先生が長に聞いた。

小太郎って誰ですか？

「それほど重くはならないでしょうがそれなりの処罰があると思います。天ヶ崎千草についても……まあその辺りは私達にお任せください」

「それより問題はある白髪のガキか……」

エヴァが聞く

見た目は両方ガキですよね

「アルト……何か言ったか?」

「いえ、なにも……」

考えが読めるのですか?

「現在調査中です。今の所彼が自ら名乗った名が“フェイト・アーウェルンクス”であることと……1ヶ月前にイスタンブールの魔法協会から日本へ研修として派遣されたということしか……おそらく偽称でしょうが……」

「ふん……」

そんな会話をしている間に木の間から一件の家が見える

「なんか秘密の隠れ家みたいねー」

「10年の間に草木が茂つてしましましたが中はきれいなものですが  
よ。じうぞネギ君」

中に入ると本がたくさん壁に並んでいた。

「スゴーイ本がたくさん」

「彼が最後に訪れた時のまま保存しています。」

「…………お父さんが…………」

キヤツキヤツ

パル達が本を取るために脚立を登り始める

「オイ、いいのかアレ?」

「素人目に何の本かわからないでしょう。お嬢様方故人の物ですか  
らあまり手荒には扱わないでくださいね」

それから思い思いに行動していたら上で父親の手がかりを探してい  
たネギ先生と一緒にいた長から

「このか、剣那君こっちへ……アスナ君とアルト君も……あなた達  
にも色々話して置いたほうが良いでしょう。」

そう言われ上にあがるあと一枚の写真を見せられた。

「…………この写真は？」

「サウザントマスターの戦友達……黒い服が私です。」

見ると若い長らしき人物を含めた六人が写っていた

「戦友？」

「ええ20年前の写真です」

「わひやー」れ父様？わかーい」

「私の隣にいるのが15歳のナギ……サウザントマスターです。」

真ん中にネギ先生をちょと成長させたような少年が写っていた

「…………父さん……」

「へーどれどれ？どれがネギのお父さんなの？」

「」Jの人やでかつ」「えー、ええ男やー ネギ君」「なるんかな」

「…………」

H「ア無言で良く見よつとしません？」

「え……」

「じつかしましたかアスナ？」

ボーッとして

「つづらにも」

「私はかつての大戦でまだ少年だったナギと共に戦った戦友でした……そして20年前に平和が戻った時、彼はすでに数々の活躍から英雄・サウザントマスターと呼ばれていたのです。」

アスナとこのかがよく分かつてない顔をしてますね…

「天ヶ崎千草の両親もその戦で命を落としています。彼女の西洋魔術師への恨みと今回の行動もそれが原因かもしません」

「……なるほど」

「以来彼と私は無二の友であつたと思います。しかし……彼は10年前、突然姿を消す……彼の最後の足取り、彼がどうなつたのかを知る者はいません。ただし公式の記録では1993年死亡」 それ以上のことば私にもすいませんネギ君」

「いえ、そんなありがとうございます。」

「結局手がかりなしか、残念だつたな兄貴」

「ううん、そんなことないよカモ君。父さんの部屋を見ただけで  
も来た甲斐があつたよ」

「ネギ君実はこれなんだがね…」

「え？」

長が丸めた古い紙をネギ先生に渡すと朝倉が

「ハーハーハーそつちのみなさん難しい話は終わつたかな？記念写真撮る  
よー下に集まつて」

「記念写真ですか？」

「そーそー忘れてたの他班はもう撮つてんだよ。」

「わ、私は良いぞそんなもん」

「エガアも一緒に撮りましょうね

「あつアルト、貴様！頭をつかむな…！」

それから全員で記念撮影をし京都駅に向かつた

「ハーア皆さんこの後私達は午前中のうちに麻帆良学園に到着、その後は学園駅にて解散、各自帰宅となりまーす。皆さーん修学旅行楽しかつたですか」

「「「ハーア／＼イエー」」」

元気ですね。

「ネギ先生ー先生も締めの一言お願いしまーす」

「あ、ハーア」

ガツ

自分の鞄に足を引っかけて転ぶネギ先生

「「「アハハハハ」」」

「全く、昨日とは別人ね…」

帰りの新幹線のなか

3 - Aのメンバーは全員寝ていた。

教師達が寝ている生徒達に毛布をかける

「やれやれ、あれほどうるさかつた3 - Aが静かなものですね。」

「ふふホントに…ハシャギ疲れたんでしょうね」

それから一列の生徒を見て

「あら……見てくださいあの三人……ぐつすり眠つて…ふふ、桜咲さんモテモテね」

そこには

アルト、刹那、このかの順に座りアルトとこのかが刹那の肩にもたれかかりながら幸せそうに寝ている姿があった

「まるで恋人達みたいですね」

「いやあ、まだまだ子供ですよ。アルトリア君は女子に混じっても違和感がないからどちらかと言えば姉妹ですね」

そうして修学旅行は終わった。

## 修学旅行 その8（後書き）

アルトリアの仮契約相手とアーティファクトのアンケートをしたいと思います。

仮契約相手はこの中から

エヴァ、ネギ、このかの三人から選んでください。

アーティファクトは能力、名前、外見などを読者の皆さんを考えてくれると嬉しいです。

締め切りは、まだ未定ですができる限り早めに答えてくれると嬉しいです。

あと、感想、誤字脱字があれば教えてください。

では、また次回

## 帰ってきて（前書き）

刹那がモテます。

あと今アンケートを募集中です。

内容はアルトの仮契約相手をエヴァ、ネギ、このかの三人の中から一人

そしてアーティファクトの能力、名前、外見を読者の皆さんに考えてくれば嬉しいです。

帰ってきて

帰ってきて一夜あけて日曜日

「ヒガア～、まだ花粉症治らないんですか？」

「そんな簡単に治るわけ無いだろ…。ぐすぐす」

「余り鼻をすすぐが良いですよ。」

「うるさいなあ」

なんて、会話をしていると

「ン」

ノックの音がした

「茶々丸出でくれ。」

「はい、マスター」

ドアを開け出迎えに行つた

「誰でしょつかねエヴァア？」

「知らん……」

「マスター、お密様です。」

「お邪魔します。」

ネギ先生とアスナが現れた。

「ここにちはアスナ、ネギ先生」

「ちやーすアルト」

氣楽ですね。

「リリに来たつてことはエヴァに何か用ですか？」

「はい。」

「ふうーん、その用件はなんですか？」

「エヴァンジエリンさん。僕を弟子にしてください。」

正座しながらお願ひするネギ先生

「何？私の弟子にだと？アホか貴様。」

凄い用件ですね。  
エヴァもいきなり否定ですか…

「一応貴様と私はまだ敵なんだぞ！？貴様の父サウザンドマスターには恨みもある。大体、私は弟子など取らんし、戦い方などタカミチにでも習えればよからぬ。」

「それを承知で今日はきました。タカミチは海外に行つたりして学園にいないし……何より京都での戦いをこの目で見て魔法使いの戦い方を学ぶならエヴァンジエリンさんしかいないと…」

あ、今エヴァピクツ反応しましたね

「…………ほつ、つまり私の強さに感動した……と」

「ハイ！」

「…………本氣か？」

「ニヤニヤしながら聞かないでくださいよ。」

「ハイ……！」

ネギ先生も少しほは考へよつ。

「フン……ふかうつむきまで言ひなうな

「え」

「ただし……！ぼーやは忘れていいようだが……私は悪い魔法使いだ。悪い魔法使いにものを頼む時にはそれなりの代償が必要だぞ……ククク」

「「ん？」」

何か嫌な予感が…

ネギ先生に向かって足を向けるエヴァ

まさか…

「まずは足をなめる。我が下僕として永遠の忠誠を誓え。話はそれからだ。」

「あほがーっ！…！」

「へふうー！？」

アスナがハマノツルギで突っ込む

凄いなあれ、エヴァの障壁簡単に壊したよ

「何突然子供にアダルトな要求してんのよー。」

「あああ、貴様、神楽坂アスナ！…弱まつてるとは言え真祖の魔法障壁をテキトーに無視するんじゃないっー！」

涙目で反論するエヴァ

「それにエヴァちゃんネギが」こんな一生懸命頼んでるのこりやつと  
ひどいんじゃない！？」

それにしても今日のアスナはやけにネギ先生の肩を持ちますね

「頭下げたくらいで物事が通るなら世の中苦労せんわ！！ハン……  
それより貴様……何でぼーやにここまで肩入れするんだ？身内でも  
ないのに。やつぱりホレたのか？10歳のガキに」

「／／／／なつ！？」

え？ そうなんですかアスナ

「ちがうぢやね。ネギは子供なのよーーー！」

「ははは、どうした耳まで赤くなってるぞ。カワイイじゃないか神樂坂アスナ」

「ち、ちがつ私はただ…」

「ムキになつて否定とは、ハハハつまり図星か！？」

「違う一つ！」

「はふあつ」

あ、またハマノツルギで突っ込んだ。

「き、貴様一度もハタいたなーーー！」

「う、いのちーい取り消しなさいよこのへボ吸血鬼ーーー！」

「なんだとーつーーー！」

「ああああ？」

ネギ先生怯えすぎです。

「マスターに物理的な突っ込みを入れられるのはアスナさんだけで  
すね」

茶々丸……そういう問題ですか？

もうやめないと

「あ、あのー」

一人の動きが止まる

「わ……わかったよ。今度の土曜日もう一度ここへ来い。弟子に取る  
かどうかテストしてやるそれでいいだろ?」

「え……あ、ありがと!」  
「まーすー。」

そう言ってネギ先生達は帰った。

「珍しいですね。エヴァが折れるなんて」

「たまにはな……」

「へえ、私ちょっと刹那のところに行つてきますね」

「……夕食までには帰れよ」

「了解」

女子寮の刹那の部屋に向かうと

「刹那～いますか？」

ガチャ

「なんですかアルト？」

「いや～暇だつたもんで」

「私、今からお嬢様の所へ行こうかなと考えていたんですが……」

「ならついて行つてもいいですか？」

「良いですよ。」

そうじてこのか達の部屋に向かう。

「こりゃしゃいへせつちやんこアルト君」

「失礼します。」

「お邪魔しますね。」

周りをみると

「意外ときれいですね…」

「どんな部屋を想像してたん?」

「いえ、アスナがいるからちょっと散らかってるかな」と思いました

て

「アハハ、アスナが聞いたら怒るえ~」

「ええですから黙つてくださいね。刹那も

「仕方ありませんね。」「しゃーないな。」

「ハハ、ありがとうございます。」

「せつちゃん、アルト君なに飲む?」

「なんでもいいです。」

「すいません、紅茶で」

「紅茶かあ……そや! 確かネギ君の机に……」

ロフトに上がって行くのか

何があるんですか?

「あつた! 紅茶の葉っぱ。」

「なぜそんな所に?」

「ネギ君がよう飲んどるからなあ」

ああそこネギ先生の場所なんですか……

「どれが良いか迷ひ選んだが。」

上にあがつてみると

紅茶の種類が結構な数あった。

「では、これで」

ライチティーを選びふとネギ先生の机に目が行つた

「なんでしょうかね？」このチョコ

「わからんなあ。」

机の上にチョコがあつた。

「一つか二つって良いですかね？」

「いいんどうやう？私も一ついいよ。あいさつ

やつして一つか二つ食べて、下に降りて行つた。

「決まりましたか？」

あれ？刹那つてこんなにカッコよかったです？

「／＼／＼ええ、一様」

ま、まともに顔が見えません。

「どうしたんですアルト？熱でもあるんですか？」

顔を近づけて熱を測る刹那

も、もう

「刹那」

「え？」

「好きです。」

そう言って押し倒した。

「／＼／＼なにをするんですかー？」

「せりちゃん……ウチも……」

「お嬢様！？」

「ああーん、せつちゃん好き好き好きや～」

「私も……刹那……あなたが好きです。大好きです。」

「／＼／＼な、なにを」

そんな刹那に助けが来た

「「ただいま。」」

リビングにネギ先生とアスナが現れた

「ああっネギ先生アスナさん助けてください～～これは一体！？」

「多分一人は僕の机にあつたチョコを食べちゃったんですよ。」

「そのチョコを食べて最初にみたやつに一目惚れする効果のな、まあ効果時間は半日程度だが」

カモが説明していく。

「え？ それじゃあ」

「あと半口はそのままです。」

「ええええええ！？」

それから半口の間ずっとマルトといのちに抱きつかれたままの刹那  
なのでした

## 帰つてきて（後書き）

誤字、脱字、アドバイスがあつたら教えてください

## ゲームして、修行して（前書き）

アンケートの締め切りは今週の土曜日になります。

皆さんのアイディアを教えてください。

それと今回は会話が八割しめてます。

状況描写?なにそれ?

状態です。

苦手な人は読まないほうがいいです。

あまりこれからのお話に関係ありませんので

ゲームして、修行して

エヴァ家

「フハハハ、私のこのコンボ抜け出してみせろ！…」

ハイ、今私はエヴァとゲームをやっています。

「言わなくても……」

この吸血鬼……じゃなかつたエヴァが私が刹那と修行の約束の時間まで暇だろ、と決めつけ無理やりやらされています。

「そらそらそらーーーどうした？体力がもう半分を切つたぞ？」

負ける訳にはいきません！！

「今です！！『極光壁』」

「なんだと！？ そうか、確かにその技を出す条件は……」

「ええ、体力が赤くなること……まだまだ行きます。『極光剣』」

どんどん相手の体力を削つて行く

「だが『極光剣』は体力が残り1になるまでやり続けなければいけない……」この技が終わった後はアルト……お前の最後だ！！」

「いえ……」この時点で私の勝ちは決定しました。」

「なんだと……もつすぐ終わるじゃないか！？」

「アイテムのグミを使用し、体力を回復！－！」

「な、なんだと！？……『極光剣』は続いているだと！？」

「体力が無くなるまでやるなら体力を無くさなければいいんです。」

そうして私は勝ちました。

何のゲームかつて？

技の名前と回復アイテムがグミってヒントで想像してください

「じゃあ次に私はこいつを使つ。」

「あ、もうこんな時間が……暇潰しで始めたのに…時間がたつのは早いですね。じゃあエヴァ、私刹那と約束がありますからちょっと行つてきますね。夕食までには帰つて来ますから」

「勝ち逃げか……まあいい。帰つて来たらもう一度だからなーーー。」

「ハイハイ。」

そつして世界樹広場に向かつた。

「アルト～」

アスナが手を振つてきた。

「アスナどうしてここへ？」

「刹那さんが剣道教えてくれる約束してたからさ。」

ああ、あの鬼に囮まれた時ね。

「ああじゅあやつましじうアルト！」

「テンション高いですね刹那……」

「とりあえず話を纏めると私は刹那の剣の練習に付き合って、アスナの剣の練習は刹那がみると……」

「ええまあそんな感じです。」

「じゃあ私もアスナの練習に少しほ手伝いましょう。」

「ホント? ー?」

「ええ」

「ありがとアルト」

「さて、じゃあまずは走り込みから始めますか……」

「ハイ

「刹那もね……」

「ハイ」

「じゃあ女子中エリア一周しようつか?」

「「え?」」

「ハイ、ダッシュ!ー!ー!」

一時間後

「ハアハアハア……」

「息きれすぎですよアスナ」

「フウフウ……」

「まあ刹那も多少体力が足りませんね」

「……どうして…あなた…息ぎれ、一つ…しないのよ……」

アスナが聞いてきた。

「これぐらいなら余裕ですよ。さて、休憩終わり。次は木刀で素振りでもしましょうか」

「「…………」「

二人とも無言で頷くだけだった。

「まあ漠然に素振りつていっても余り上達はしません。最初のうちはそれで良いかも知れませんが刹那ぐらいのレベルなら相手を意識して素振りをしなさい。」

「……私は？」

「アスナは刹那を見て振り方、動き方を学びながらやつたら良いでしょう。分からぬ事があつたら刹那か私に聞きなさい。刹那……あなたは相手のイメージが湧きにくいと言うならまず私とこの木刀

で模擬戦しますか?「

「いえ、とりあえず月詠のイメージがまだありますから

「そうですか……じゃあ始めましょ!」

素振りを始める一人

私はなにをしまじょうか?

素振りでもしますか……

「……」

45分後

「アルト、なんかイメージが狂ってきた。」

「私もです。」

「じゃあ軽く打ち込みをやりましょうか……アスナはハマノツルギ、  
刹那は夕凪で……私が木刀を構えますからとりあえず打ち込んで来てください。」

「じゃあ私が」

「アスナからですか」

それからさらに一時間後

「じゃあ今日せめて…」

「あ、刹那さん、」Jのかが今日の晩御飯つかない…だつて。

「いただきます。」

「アルトせびりある？」

嬉しい誘いなんですが……

「Hガアが待つてるので帰ります。」

「じゃあね~」

「わよひなら」

やがて今日の一冊は終わった。

## 弟子入りまで その一（前書き）

アンケートよろしくお願いします。

活動報告のほうも書いてありますので

## 弟子入りまで その一

「おー、アルト。起きる」

「…………う~、なんですかエガニア?」

まだ午前4時ですね

「ふと、目が覚めたからな…… 散歩に行くぞ」

「行つてらっしゃい~」

「お前もだ。」

あああああ

寝たいです~

「分かりましたよ。着替えるから少し待つてください。」

着替えが終わり散歩に行く

早朝のためか誰ともすれ違わない。

「エグア」

「なんだアルト」

「どこに行くんですか?」

「世界樹広場にぼーやの魔力の気配がするからな

ああ、会いに行くと……

それから1~5分ぐらいたつて世界樹広場に近づいていくと

パシング  
パシーン

何か音が聞こえてきました。

足運びの音でしょうか?

「エグア。ネギ先生かも知れませんね?」

「そうだな。」

世界樹広場の階段を登つて行くとネギ先生とまき絵がいた

「ね、ね、今のもつかいやつてよ

「あ、せー……」

会話が聞こえる距離まで近づく

と

「フン……カンフーか……ずいぶんと熱心じゃないかぼーや」

「おはよウーラウコモド。ネギ先生、おを繪。」

「あれー？ ハウア セマ茶々丸さん、アルト君おはよー。」

「あ、おはよウーラウコモドー！ お仕事ですか？」

「残念ながら違います。ただハウアが早く目が覚めたりして、散歩に付き合つてるだけです。」

「カンフーの修行をすることにしたのか？ じゃあ私への弟子入りの件は白紙ということでいいんだな。」

むすゞとした顔してゐ

「えりつーっ」

エヴァ……ヤキモチですか？

まき詰……わまつて……下僕になつた時の記憶があるんですかね？

「あつ、いえ、これは、そのつ……あの少年の戦い方の研究でつ……」

アワアワしながら言い訳をするネギ先生

……ネギ先生何か悪いことしましたっけ？

「こーよ別に、元々私は弟子など取るつもりなかつたしな

「あわわ違つんですーっ……」

「どゆーとへネギ君

「えとあのエヴァンジョンジョンさんの弟子にしてしまひつつもつだ  
たんですけどーっ」「

「じゃあな。ま、子供にはカンフーじつはお似合こだよ。」

「…………ヤキモチですか？エヴァノマスター」

茶々丸と声が揃つてしまつた。

「なつ……ち、ちがうわつ……！」

## あわてて否定するエヴァ

それだけ否定的だとかえつて照れ隠しだと思われますよ。

「ちょっと一エヴァちゃん何でネギ君にイジワルするのー?弟子に  
くらいしてあげればいいのに。なんの弟子か知らないけど」

「ヤキモチだそ�です。」

「ソンナ氣一入ツテノカアノガキ」

茶々零……私の頭の上で喋らないでくださいよ……

「あがいのうーのうー！」

「ああ、エヴァ。照れ隠しに私の首もとを持つて揺りすの止めてくれませんか？」

「フン子供の遊びに付き合つ趣味はないんだよ。お前みたいな子供っぽい奴と話すのもな佐々木まき絵。」

子供っぽいって単語が気になつたのか

「な……何よーー！エヴァちゃんだつてお子ちゃまみたいな体型じゃん！ふーんだ、いいもんねーネギ君。あーんなに“強かつたんだもん！”エヴァちゃんなんかに教えてもらわなくともすぐに達人だよーだー！」

「ぬ……（じつわざかに記憶があるのか？）もと下僕のくせに……いいだらう。たつた今貴様の弟子入りテストの内容を決めたぞ」

おや、なんか怒りに任して決めてません？エヴァ

「そのカンフーもじきで茶々丸に一撃でも入れてみるがいい。それで合格にしてやるつ……ただし一対一でだ。」

「いーよ わかったー！そんなのネギ君なら楽勝だよー」

「ま、ま、まき絵さん！？」

災難ですねネギ先生

「もんでやれ茶々丸」

「ハ、しかし…」

「いいから行けケガせん程度でいい。」

「ハイ、失礼しますネギ先生」

茶々丸が一瞬にしてネギ先生との距離を詰める。

そして右の手刀でネギ先生の体制を崩し蹴り飛ばす。

「はぐつ

ドカアツ

「あー・ネギ君つ」

これだけで終わつた。

「茶々丸に一発も入れられないようならどの道貴様に芽はない。場

所はここ時刻は日曜日午前0時にまけてやる。ま、せいぜいがんばることだな。」

私と茶々丸は一礼してからその場をさる。

「ネギ！？」

「ネギ坊主！？」

「ネギ先生！？」

アスナに刹那にクーフェですか……早めに去りましょう……見つかつたらうるさいでしょうし……

「ちょっと大丈夫何があつたの？」

「しかしするアル」

そんな声を聞きながら私たちは家へ戻った。

「エヴァ、悪いですけど今回は私ネギ先生の方を応援させていただきますね。」

「ん~？なぜだ？」

「面白くなりそうですし……」

「まあぼーやに直接指導しないなら別に良いぞ。今回だけな……」

「ありがとうございます。エヴァ」

そうして朝食を食べ、学校に行く準備をする  
その日の放課後

世界樹広場

さつそくカンフーの修行を始めるネギ先生

「ネギ坊主は恐ろしく飲み込みが早いし才能もあると思うが……2日  
だけではどうにもならんアルよ」

クーフェとカンフーで戦っているネギ先生

その間に私はアスナたちに何が合ったかを説明する

「じゃあエヴァちゃんとの弟子いりはダメってこと?」

「ネギ先生は格闘については素人ですから……」

「しかし、魔法を使えばどうにかなるかも知れませんよ。」

そんな会話をしていたとき絵が走ってきた。

「ネギくーん お弁当たべて作ってみたよー。」

「えつー…ありがと!! もうー。」

「凄い量ありますね。」

「あれ? アルト君エバーグリーン側じゃないの?」

「こえ、今回ばかりは着てました。迷惑でしたか?」

「こえ、そんなことは…。」

とか言つてお聞きじとお弁当が広げられてこへ。

「勝負に勝つにはまずスタイルつかなきやね」

「わーおこしちゃー」

ネギ先生にアスナ…… そんなにお腹減つてたんですか?

「でしょでしょ 料理は得意なんだ。たくさん食べてー」

「いっぺい作たアルねー」

「重箱が1、2……18箱！？作り過ぎじゃ無いですかね？」

そして無理やり食べきった結果

ネギ先生が太ってしまった

「よ……余計弱くなてしまたアル……小太りカンフーファイターアル」

「「えつ……？」」

良くあの短時間で太りますね

「「1」「めんネギ君」」

「大丈夫デフよ」

「普通に喋れない時点で大丈夫じゃ無いでしょ」…

「でも、大丈夫だよ…！我が部に伝わる秘密のダイエット術で！」

そう言ってカバンの中からいろいろ取り出すまき絵

「全身にラップをぐるぐる巻きにして、その上に毛布三枚かぶつて、  
んで学園サウナで三時間…」

「いやー死にますよソレー？」

## 結果

「あああさらりと弱く…」

「いやああ～～ん！？」

もとより瘦せてしまったネギ先生… 大丈夫なんですか？

「ハハハ、大丈夫ですよ。」

見た感じフラフラなんだが

「ホンシットにごめんネギ君私のせいだ。手伝おつと思つたのに迷惑かけちゃって……」

「大丈夫ですつてまき絵さん」

「でも日曜日まであと2日しかないんだよ……あれ? 日曜日?」

「日曜日に何があるんですかまき絵?」

「あーっ忘れてた!! 私も日曜日に大会の選抜テストあるんだった! ?」

「えーっ!! 大丈夫なの?」

「それがその……そっちの方も全然自信なくて……」

落ち込むまき絵

「えー、ビックリして」

「私の演技子供だって先生が……ネギ君にも迷惑かけちゃうしもー

私だめ……」

沈黙の空氣

そのなか口を開いたのはクーフュだった

「何いつてるアルかーつー?バカピンク」

「うしくないわよ。」

「元氣出しひ」

「元氣じやないまき絵はまき絵じやないですよ。」

「わうだー!まきちゃんの新体操見せてよー!…リボンがいいな

「ええつー!…そんなのダメだよー」

「いいじゃん見せて見せて

「でもう…」

「あ……僕もみたいです。まき絵さんの新体操つて見たことないし

…

「う…ネギ君……じゃあちよつとだけね…」

新体操の準備をするまき絵

さて、

「刹那すいませんが今日は帰りますね」

「え? 見ていかないんですか?」

「見たいのは山々なんですが……まき絵……スカートでしょ? ?」

「ああなたはめざ……分かりました。皆さんに伝えとけばよいんです  
ねアルト」

「ええ。それでは」

「おやすみなさい。」

そして私は家に帰つてエヴァと一緒にゲームをして

今日を終えた。

弟子入りまで その1（後書き）

感想、誤字脱字があれば教えてください。

## 弟子入りまで その2（前書き）

12月11日土曜日までアンケート募集しています

内容はアルトの仮契約相手をエヴァ、ネギ、このかの三人の中から  
一人

とアルトのアーティファクトの名前、外見、能力を募集しています。

皆さんのが考えたアーティファクトを教えてください。

## 弟子入りまで その2

次の日の朝

「朝早く失礼します。」

刹那が家に来ました。

「どうしたんですか？刹那。こんな早くから」

ちなみにエヴァはまだ寝ている……私もつこなつき起きたばっかのためまだパジャマ姿だ

「いえ、もうすぐアスナさんの配達が終わる時間ですので朝から練習したいと思ったので……ダメでしたか？」

まあ前日に書つて欲しかったんですけど……

「少し待つてください……着替えますから。」

「ハイ」

着替え終わりアスナを迎えて女子寮に向かう

「おはよー刹那さんにアルト…」

「「おはよう」ゼニカア」」

それから雑談しながら世界樹広場に向かった。

世界樹広場にはなんか髪をつけたクーフンとベトベトに疲れている  
まき絵とネギ先生がいた。

そしてなぜか後ろには木で作られたような外見のロボットがいた。

「何アホなことやつてんのよ?」

「あ、アルトに刹那にアスナ 配達終わったアルか?」

今までやつていた練習内容を聞くと

空中に逆さで吊るされた状態でクーフュから飛ばされる木切れをすべて防ぎきる特訓

木で作られたような外見のロボットが攻撃してくる道を潜り抜けて行く特訓

そしてこのあとまだ鉄下駄10キロマラソンとかワンインチパンチとかいろいろ考えてたそうです。

説明を聞いてアスナが

「モーゆー練習ついて毎日やらないとダメなんじゃない?」

「ム、やはりそうか!昔のマンガや映画を参考に地獄の特訓メニューを考えたのは失敗だたかナ。」

「くー老師!？」  
「クーフュのバカーッ!！」

「もつと参考になるものがあるでしょ」「……」

「まあまあアルト……クーフュさんですし」

それから私達三人は剣術の練習をしたりして学校に行きました。

放課後

また世界樹広場に集まつた私達

「ニヤハハハ朝はスマンかたアル。ここからはマジメにやるネ」

すまなそうに謝るクーフュ

「もーしつかりしてよクーフュ」

「やつ言えば」のか。」「

「なに? アルト君」

「どうしているんですか?」

「せつちゃんとアルト君が気になつたからやな。」

「……………ですか。」

「よしネギ坊主茶々丸に勝つ方法を考えるね。」  
「うち来るアル。」

「ハイ」

ネギ先生たちは特訓に入る

「じゃあ刹那さん、アルト朝の続きをやうつか。」

「ええ」

「じゃあアスナと刹那で軽く打ち合つてください。」

軽く打ち合い始める二人

まだ練習始めたばかりですがアスナはちゃんと上達していますね

するヒヤヒヤまき絵が

「アスナも刹那さんとアルト君に剣道習つてゐるの?」

「え、うん。朝も配達の後にちょっとね。」

「ネギ君もだけど……何でイキナリ?」

「えーとその、修学旅行でいろいろあつて……私の場合は何か成り行きつて感じだから別にやんなくてもいいんだけど……刹那さんやアルトといつして練習してゐるのも楽しいしね。」

嬉しい」とを言つてくれますね。

「まあでもネギ先生の場合はずやんと田舎がありますよ。」

「え? なになに? アルト君、ネギ君やっぱり何かあるの?」

「それは……言つて良いのか分かりませんので……それに私は詳しく聞いた訳ではないので……」

「えー何よケチー……教えてよー」

「本人に直接聞いてみてはどうですか？」

刹那……ナイス助け船

それからネギ先生のほうに向かつたまき絵

すると何か思ったのか急に立ち止まり

「頑張るーね！！ネギ君ー！」

イキナリそう言い切った。

「よーし明日は土曜で休みだしぶつ続けて練習頑張るよーっ

「「オーッー。」」

「「ハハ」あんた達睡眠はちゃんと取りなさいよ。」

「さて、私達も続きしましょうか？」

「そうですね。」

そしてネギ先生に付き合つて翌日

土曜日 午後4時

ネギ先生が弟子入りテストまで残り八時間

「よしーそこまでアルネギ坊主。」

クーフェがネギ先生の動きを止め

「これで時間内に教えられるコトは全て教えたアルー！後は運を天に任せ残りの八時間は休息と復習に使うヨロシー！」

「ハイツ！くー 老師。」

すると

「おーい」

裕奈とアキラと畠子がなにかを持つてきました。

「ネギ君今夜何か試合するんだって！？」

「差し入れに豪華特製夕御飯弁当作ってきたわー」

それから全員でお弁当を食べ始める

「ほんでその試合には勝てそうなん？」

「裕奈口にワインナーくわえながら喋らないでくださいよ。」

「いーじゅん。かたいなあアルトは。」

「それがこのネギ坊主、反則氣味に飲み込みがいいアルよ。フツーならサマになるのに一月とかかる技を三時間で覚えるアル。全くどーなつともかねこのガキは……世の中不公平アル」

「へえ～つー

「……でもそれ位じゃないと一〇歳で先生なんてできないかも…………」

まあアキラが言つても一理ありますね

「そつかーーそつかが天才少年ーーじゃ、楽勝だねーー！」

「いえ、あの、そんなことは…………」

ネギ先生が否定しようとしますが

「ん？」

何か匂いますね……ネギ先生からですか？

アスナも気づいたようです

「ちよつとネギあんたなんかくさくない？」

「え？」

「あんたまさか……またお風呂入つてないとか？何日入つてないの？」

「いやつ……」

本当ですかネギ先生……

「お風呂<sup>ヨウ</sup>に入りましょ」

「あんたは～」

「いえつあのー…これはちょっと忘れてて……」

「言い訳しないつホラ来なさいーー洗つてあげるから」

ズルズルネギ先生を引きずるアスナ

シャワーを浴びに行くんでしょうか？

ならついて行くわけには行きませんね

「アルトも行くわよー」

「あ、アスナ！？何いつてヘルンですか？」

「何つてあなたも汗かいてるでしょ？」

「……せ、刹那！？」

助けを求め刹那をみますが……

「これ、美味しいですね。」

「でしょー実は味付けに秘密があるんよ」

亜子と料理の話をしている

その間にもどんどん引っ張られていく。

「アスナ～私男なんですが……」

やつ言ひしょりやへ氣づいたのか

「あ、やつ言えればそうだったわね。余りにも自然に誘つちやつたわ。  
アハハ」

笑つて誤魔化そうとしてません?

まあ良いですが

「汗をかいているのは事実ですか?……一曰帰りますね。それで  
はネギ先生また夜に……」

「ええまた後で」

やつして一曰別れた

弟子いつまでも やのわ（漫畫）

弟子いり編 最終話

長かった……

アンケートのほうもよろしくお願いします。

## 弟子いつまで もの

日曜日 午前0時ちょっと前

世界樹広場

いま私はエヴァと茶々丸と茶々零の四人でネギ先生が来るのを待つてます

すると壁にもたれかかっている茶々零が

「オイ御主人コレジャ試合ガ見エネーゾ。モットトイイ位置一座ラセロヤ」

「全く役立たずのくせに口うるさい奴だ」

「仕方ネーダロ動ケネーンダカラ。」

「なら茶々零私の頭の上で良いですが?」

「ウン? マア オ前ノ頭ノ上ナラコハヨコイイダロ」

そう言って頭の上にのつけた。

すると今まで口を開かなかつた茶々丸が

「しかし……良いのですかマスター。ネギ先生が私に一撃を『』える確率は概算約3%以下……ネギ先生が合格できなければマスターとしても不本意なのでは?」

「…………おい勘違いするなよ茶々丸。私はホントに弟子などいらんのだ。メンドいからな」

「素直じゃないですね」

ちゅうとからかってみる

「ホントだ!!それには……一撃当てれば合格などと破格の条件だ。これでダメならぼーやが悪い……いいな茶々丸手を抜いたりするなよ。」

「ハ……了解しました」

「そろそろ時間か……」

エヴァが時計で時間を確認すると

「…………どうやら来たよつですょ」

ネギ先生達がちょうど來た

「ネギ・スプリングフィールド弟子入りテストを受けに來ました！」

力チツ

ちょうどの時になつた

「時間通りですねネギ先生」

「フフ……よく來たなぼーや。では早速始めようか。お前のカンフーもどきで茶々丸に一撃でも入れられれば合格。手も足も出さずに貴様がくたばればそれまでだ。わかったか？」

「……その条件でいいんですね？」

何か考えがあるのかネギ先生がちょっと笑つた

「ん？ああいぞ……それよりも……そのギャラリーは何とかならんかったのか！」

昼間にいたメンバー全員ですか……

「はあ……ついて来ちゃつて……」

そしてテストに入る

応援メンバーから言葉を貰うネギ先生

私も何か言つたほうが良いのでしょうか?

まあ皆さんが言つてますし私も一言

「ネギ先生」

「なんですかアルトさん」

「一言だけアドバイスを……決して諦めないこと……実力に差があるのは自分でも分かっているでしょう。ならイメージだけでも……心の中だけでも勝ちなさい……そうすればきっと……茶々丸に届くはずです」

「……ハイツ……」

そつしてテストが始まる

私はせつかく今回エヴァが許可をくれたのでみんながいる方で観戦します。

茶々零？

もうひんまだ頭の上ですよ？

「茶々丸さん。 お願いします！」

「お相手させて頂きます」

「だ、大丈夫だよねアルト君」

「まき絵……微妙でしょうね。正直な話単純な確率では茶々丸曰く3%以下確率しか無いそうですし…… 実際茶々丸はかなり強い」

「つまり長引けば不利！ 最初の1分でカウンターを当てられなければネギ坊主に勝ちはないアル」

「そんな……」

「そうでもありませんよクーフH。」

「なぜアルか?」

「ネギ先生は根性ありますから」

そして

「では始めるがいい!…」

エヴァの声によりテストは始まった。

「失礼します」

茶々丸が近づく

「契約執行90秒間ネギスプリングフィールド!…」

自身に魔力供給を開始するネギ先生

まず茶々丸の左をガードする。しかし茶々丸の右肘からブースターが出て一気に加速したパンチが来るがそれを受け流しその力をそのままいかし技に

「ハ極拳転身跨打！！」

しかし茶々丸にガードされる

「おお……」

「む、惜しい……」

それからしばらく打ち合戦が始まる。

「ななな、何やコレ！」

「ボコボコ殴りあうだけと思つたのに何者この一人！？」

そうか、祐奈たちは一般人でしたね

おつと茶々丸のいい蹴りが入りましたね。

「ネギ君！！」

「いや作戦じおりーーあれば誘いアル！！」

クーフェが言つたどおり罷だつたのかすぐにネギ先生は構え直す。茶々丸の右ストレーントを左に流しそのまま左をつかんだまま肘うちをしようとするが

「甘いですねネギ先生」

そんな間に茶々丸が引っ掛かるはずないのに……

茶々丸は捕まれた左手を支点に回転しその勢いのままネギ先生を蹴り飛ばす

「……チッ（この程度か……）」

「「キゲンナナメダナ御主人」

「茶々零ひじりこの間はあまり喋らないでくださいよ……」

まあ確かに「キゲンは悪そうですが……

「残念だつたなぼーや。だが、それが貴様の器だ。顔を洗つて出直  
して」と

まあこの程度で諦めるハズ無いんですけどね……

「く……くく」

やはり立ちましたか

「まだです……まだ僕くたばつてしませんよヒヴァンジョンさん」

「ぬつ……？何を言つてこらる？勝負は着いたぞガキは帰つて寝る。」

「アイシヒット直前一障壁二魔力ヲ集中サセタナ。」

「だ～か～ら～、喋らないでください。」

「……でも条件は、僕がくたばるまで、でしたよね。それに確か時間制限もなかったと思ってますけど？」

「エリでよつやくネギ先生の考えてこることがわかったのか

「な……何つー…まさか貴様……」

「くく……そのとおり一撃当てるまで何時間でも粘らせておひります。  
……茶々丸さん続きを…」

「し、しかし先生……」

「やああああーーー！」

ネギ先生が近づこうとするが契約執行が切れたせいかスピードがない

「茶々丸さん…ほ、本気でお願いします。手加減されて合格しても意味ないですから」

膝をつきながら茶々丸に言ひ

「で……でも」

「茶々丸、本氣でも良いと思つますよ。」

「しかしアルトさん……」

「ネギ先生が本氣でと言つたんですから……大丈夫ですよ」

会話をしてる間にもネギ先生は攻撃した

「……わかりました」

それから一時間以上の間一方的にやられるネギ先生

「はあ……はあ……はあ」

息も途切れ途切れですし顔も腫れていますね。

「お、おこぼーやもういいだろ。いくら防御に魔力を集中しても限界がある。お前のやる気はわかったからな？」

「根性アルナー・アイツ。」

「でしょ、茶々零」

だけどネギ先生は

「い、いえま、まり……あきらめないでふ……」

茶々丸に未だ挑んでいく

「センセーも一やめてーっ……」

「もう一時間以上になる」

「ネギ君何でみんなにがんばるのー？」

亜子とアキラと祐奈が心配そうにする

「……」

アスナ……涙田ですか……

「も、もつ見てらんない止めへぬ……」

「オ、オウアスナ」

クーフュとアスナが止めに入りつとするが

「ダメーッアスナ！…止めぢやダメーッ…！」

「で、でも、あいつあんなボロボロになつて……あやじまで頑張る  
ことじやないよ…」

「わかつてゐ、わかつてゐけど……！」で止めるまつがネギ君には  
ひどいと思ひ。だつてネギ君どんなことでも頑張るつて言つてたも  
ん…！」

「まきぢや…………でも…………あいつのあれば子供のワガママじやん  
！ただの意地つ張りだよ。止めてあげなきや……」

「違つよつネギ君は大人だよ…」

「ま、まきぢやんシャワーでもやつたけど、あいつぢいかりど  
う見たつて……」

「子供の意地つ張りであそこまで出来ませぬよ

「アルト……あんたまで……」

「そりゃ見た目は子供かもしだせん……だけビネギ先生の行動には信念がある……覚悟がある……だから……邪魔してはダメです。」

「アスナ自分でも友達でも先輩でもいいし男の子の知り合いでいいけどネギ君みたいに目的持つてる子いる?あやふやな夢みたいのじゃなくてちゃんとこれだつて決めて生きてる人いる?」

「そ、それは……」

ネギ先生以外のみんながまき絵に注目する。

(なんだあれは……あ、青い……これが若さか……)

「ネギ君は大人なんだよ。だって目的持つてがんばってるもん。だから……今は止めちゃダメ。」

「……まきちゃん……」

(／＼／＼ふ／＼ん、中3のガキの割には……)

「照レテヤガンナ御主人」

「まき絵かこ……」

茶々丸がじゅらじゅら氣を取られる。

「ネギ先生今です！…！」

「あ……オイ茶々丸！…！」

エヴァと声が被るが

「えつ」

ペчинつ

ひょりつしたパンチが一発茶々丸に入った

「……あ

「なー？」

「今……当たりまふいたよね……」

「ええネギ先生。私がしつかり見てましたよ。」

「え…へへ…」

ドサツ

# ネギ先生が倒れる

「「「ヤツターッー！」」

ネギくん

まき絵たちがネギ先生に近づく

「コラ一茶々丸一ツ！！」

す、すすすすいませんマスター！！

チュンチュン

うわあ、鳥が鳴き始めましたよ……

夜が明けますね

じばくへつ

「う…………あれ? ぼ…………僕? テストは…………?」

ネギ先生が目を覚ます

「大丈夫よネギ。」

「合格だよネギ君」

「……ふん負けたよぼーや。約束どおり稽古はつけてやる。いつでも小屋に来な。」

「……ああそれとな、そのカンフーの修行は続けておけ。どのみち体術は必要だしな。理屈っぽいお前に中国拳法はお似合いだよ。じやあな……ああそれとアルト。早めに帰つてこいよ。」

「ハイハイ。」

「あ、ありがとうございます。ヒヴァンジエリンさん……」

「ネギ坊主よくやったアル！！」

「スゲーよネギ君」

「見直したわー」

「ネギ君ウチ」ほつびに美味しい」はん作つたげるからなーッ……」

「よく頑張りましたねネギ先生」

「…………アルトさん…………あなたの言葉があつたからですよ…………」

「いえ、ネギ先生あなた自身が頑張ったからですよ…………それと……さん付けはいりませんよ。」

「わかりました。…………アルト…………」

「ハイ、良く出来ました。」

それからネギを部屋まで運んでいった。

このあとこまき絵は新体操の選抜テストがあるらしいが

まあ今のまき絵なら受かるでしょう。

とりあえず部屋に運んだら治療ですかね



# スキット集 修学旅行～弟子いりまで（前書き）

15万PV突破ああああ！！

皆さんのおかげです。

おつがとハジマニモア。

これからも頑張つて行くんですよーしくお願ひします。

ではスキット集です。

テイルズシリーズにあるような会話が中心の話です。

スキット集 修学旅行～弟子いりまで

食事中

アルト「モグモグ」

朝倉、クーフュ、まき絵「「「じ～」「

アルト「モグモグモグモグ」

まき絵「ねえ朝倉なんでアルト君つてあんなに食べても太らないの？」

クーフュ「うわあ、またおかわりしたアルね。」

朝倉「今のおひつが三つめだよ。」

クーフュ「あの小さい体によくあんなに入るアル。」

三人「「「どうしてだらう?」」「

アルト「モグモグ」

ホテルでの朝食風景でした

路上にて

男A「ハーヴィ彼女お茶しない?」

アルト「……ずいぶん古典的なナンパですね。」

男A「うーん、冷たいねえ。で、どう?」

アルト「友人を待たせてるんで「甘いもの齧るよ」……待ち合わせ  
があるんで」

エヴァ「いま、揺れたよなアルトのやつ」

茶々丸「揺れましたねマスター」

ナンパされていた所を田撃したエヴァと茶々丸でした

学校で…

ネギ「では」の問題を……」

アスナ「ヒヨイ（田代久）」

ネギ「うーん」

まき絵「ヒヨイ（田代久）」

ネギ「……えつと……アルトさん」

アルト「無理ですネギ先生」

ネギ「チャレンジしましょー！」

アルト「日本語も上手く話せるかどうかなのに英語なんか論外です。

」

このか「なあなあせつちゃん」

刹那「なにこのちゃん？」

このか「アルト君って見た目外人やよね？」

刹那「そうですね」

このか「なのに英語が苦手つて不思議やなあ。」

ネギの授業の一風景

女子寮にて

アルト「刹那～暇です。」

刹那「アルト……人のベッドで寝ぐの止めてくれません？」

アルト「嫌ですか刹那の匂いが好きなんで」

刹那「／＼／＼……」

アルト「わっせ

刹那「／＼＼＼＼うわあ……ちょっと」アルト「人をベッドに下さります  
りこまないでくださいよ……」

アルト「いいからいいから、はあ～落ち着きますね。」

刹那「……私はあなたの枕ですか……」

アルト「まあ良いじゃないですか……畳寝しましょ」

刹那「……仕方ないです」

真名が帰つてくるまでその状態で寝ていた一人なのでした。

体育にて

アルト「エヴァいきますよ。」

エヴァ「よし、来い！！」

アルト「それ！」

カキーン

ド「コッ！！

エヴァ「お、おいおい」

アルト「ありや？」

ネギ「う、うーん」

アルト「大丈夫ですかネギ先生」

ネギ「だ、大丈夫ですよ……なんとか」

エヴァ「アルト！！おもいつきり打ちすぎだーー！」

アルト「だつて来たボールはおもいつきり打てつて教科書に……」

刹那「ノックの練習であそこまで強く打つのは……」

アルト「……すいません」

体育の時間にソフトボールのノックをやつていてネギに当たつちやつたよ事件

## 料理の腕前 その1

アルト「所で刹那の料理の腕前つてどうなんですか?」

刹那「エッ!?

アルト「……あー、良いです……今まで大体分かりました。」

刹那「ちょ、ちょつとアルト……」

アルト「大丈夫ですよ刹那。この世には料理が下手な人なんていくらでもありますから……」

刹那「…………うわへん」のうわへん」

アルト「刹那！？……走つて行つちゃついましたか……」

刹那「このうわへん……」

このか「どうしたんせりちやん？」

刹那「ウチに料理教えて！……」

このか「べ、別にいいけど……」

刹那（よーし、見ててくだわ）よアルト！その認識改めてさせてあ

げます。 )

刹那の料理の腕前  
… 続く

休みまつり。（前書き）

今日はちよつと短いです。

アンケートのほうもよろしくお願ひします。

## 休みまじょう。

弟子いりテストの後私達はネギ先生達の部屋にいた

「ハイ、ネギ君動かんでなー」

消毒しながら治療をするこのか

「あたたた！」

その様子を下でアスナ、刹那と私は京都で買つてきたおたべを食べながら見ていた。

「こんなになるまでがんばつてー。もーネギ君意外と熱血なんやな  
ー」

「す、すいません。」

「でもさーこのか。修学旅行の時みたくあんたの能力でパーティと治してあげたり出来ないの？」

「んーでもあの時ウチエヴァちゃんに言われたとおりやつただけやし、それにウチまほーなんてどう使ってえーかわからん。」

「そりゃモーカ

「僕も回復系はあんまり…」

「今度教わりに行つてもいいかも知れないですねエヴァンジエリンさんに。アルトはそういうの出来ないんですか?」

「刹那<sup>アヴァロン</sup>そりゃ出来たらやつてますよ……確かに自分を回復させられる物は持つてますがネギを回復するのは無理ですね」

「いやー しかしお疲れだぜ兄貴。」

「うん。これで色々エヴァンジエリンさんに教えてもらえるしクーフュさんも修行続けてくれるつゝ言つてたし、後はがんばるだけだよ。」

「しかし大変なのはこれからだぜ兄貴。」

「…………そうですね。特に格闘技術等は頭で理解するだけでなく長い時間をかけて正しい形と用法を体に覚え込ませていかなければ昨日

の茶々丸さんのような人には勝てません。それでも昨日の先生はスゴかったです……修行がんばってくださいね。先生」

「ハイ刹那さん」

「まあ、昨日のあれは茶々丸が見せた隙をついたもんですね……今までまじや私にも一撃を食らわせるることは無理でしょう。精進してくださいねネギ。」

ちよつと釘を刺しておぐ。調子に乗るとは思いませんがね

「うう……ハイ、アルト（やつぱり）アルトは強いんですね……実際に戦ってる所は一回しか見たこと無いですし……よーし！…がんばるぞ！」

ネギが何かの決心を固めたようなところをアスナが

「やうだ。ネギあの手がかりの地図はどうなったのよ。」

「あ、それなんですけど」

何ですか地図って？

聞いつけとした時に

ピンポーン

インター ホンがなった。

「ハーハー」

このかが玄関に出ていく

「あれー茶々丸さんや。どうしたん? ネギ君つうんじのん?」

ネギが玄関に向かう

「どういえばアルトゥヒセ

「なんですかアスナ?」

「ぶつちゅけどれぐらこ強じの?」

強さですか……

「今のネギより上の自信はあります。刹那とは……いい感じに打ち合ひ」とは出来ますがまあ、私が勝つでしょうね。」

「ウッ……」

「そ、そんな落ち込まないでください刹那！あくまでも今は、です。一緒に修行すれば私より強くなりまやよ。」

「なんか慰めてもうりつて……私はやつぱりダメですね……」

完璧にネガティブモードですね……

どりしあしょい……

「じゃ、じゃあアルトがこの学園で勝てない相手は？」

アスナが質問を変えてきた。

助かります

「勝てない相手ですか……ヒガアには勝てる気しませんね。」

強さは一流の魔法使いですし……

「ふ～ん」

なんて話をしていると茶々丸とまき絵に虫子が入ってきた。

「お邪魔しまーす！…！」

「「お邪魔します」」

「どうでした選抜テストは？」

まき絵に聞いてみる

「うんー、聞いて聞いてアルト君。受かったんだー選抜テストー！…！」

「良かつたですねまき絵

「うん良かつたよ。」

それでお祝いのお茶会を開いた。

そのお茶会の途中

アスナとネギが出てこきましたがまあそれ以外は普通のお茶会でした。

「あ、このか。」

「なに? アルト君?」

「ネギに明日図書館島に来てください」と云ふところで貰えませんか?  
ヒガアが早速修行をするそうですの……」

「わかつたえ~」

「では、お邪魔しました。」

徹夜だったのに凄い眠いです。

早く帰って寝ましょう

## 修行とケンカ

次の日

図書館島の一角

修学旅行で魔法使いの関係者のメンバーがネギの修行のため集まつた。

「よし、では始める。刹那コソフリクト”気”は抑えておけ。相応の練習がなければ”魔力”と”気”は相反するだけだ」

「はい、エヴァンジェリンさん（やはりそうだったか）」

「いきます」

エヴァンジエリンが指示をだしネギが始める

「契約執行180秒間！」

パクティオーカードに魔力を送り始める

「ネギの従者近衛このか！－！宮崎のどか！－！神楽坂アスナ！－！桜咲

刹那

名前を呼ばれた四人にネギの魔力が行く

四人の反応は

「うひゃひゃつこやばー」

「あう……」

「慣れないのよね」「レ」

「そうですか？私はそれ程……」

全員違う反応を示しますね

「よしこうだ。対物・魔法障壁全方位全力展開！」

「ハイ！」

次の指示を出す

それから少しして

「 次！対魔・魔法障壁全力展開！！」

トマトジュースを飲みながら指示を出す。

「ハイ！」

「そのまま3分もちこたえた後北の空へ魔法の射手199本！！結界張つてあるから遠慮せずやれ！」

「うぐつ……ハ、ハイ！！」

「そろそろ辛くなってきたようですね

「光の精靈199柱集い来りて敵を射て！！！」

ネギが魔法を放つが……

「せんせー？」

「ネギくーんー？」

魔力を使いすぎで氣絶しましたか……

「フン、ここの程度で氣絶とは話にもならんわ……いくら奴隸りの強大な魔力があつたとしても使いこなせなければ宝の持ち腐れだ！！」

「よーよーエヴァンジエリンさんよおそりや言い過ぎだろ？兄貴は10歳だぜ。四人同時結界3分+魔法の矢199本なんて修学旅行の戦い以上の魔力消費じゃねーか。氣絶して当然だぜ。並の術者だったらこれでも十分……」

バカですか力モ、エヴァにそんなこと言つても無駄に決まってるでしょうに

「黙れこの下等生物が……並の術者程度で満足出来るか……煮て食うぞ？元々貴様不法侵入者だしな。第一、コレぐらいならアルトだつてこなせるわあ！！」

力モが怯えてアスナに抱きつく

「私を師と呼び教えるの以上生半可な修業ですむと思うな。いいか、ぼーや。今後私の前でどんな口応えも泣き事も許さん。少しでも弱音を吐けば貴様の生き血、最後の一滴まで飲み干してやる。心しておけよ。」

殺氣を出しながら忠告するエヴァ

だがネギは

「はい…みりじへも願いしますエヴァンジルコンセー…」

「む…」

予想外の返答にたじなんですね

「わ、私のことは<sup>マスター</sup>歸匠と呼べ

「はい、マスター…あのつといひで…」

何か聞きたい事でもあるんでしちゃうか

「ゼゴンを倒せるようになることはどう位修業すればいいですか?」

「アーヴィング?」

「何?…もう一回囁いてみる」

エヴァも同じ事を思つたのかもう一度聞いた

「ですか」「アーヴィング」を……

「恐る恐るアドバンスか…………」

「はい！」

「アホかーッ！！」

# エヴァのグーパンに入る

「ペふあ！？」

「21世紀の日本でドラゴンなんかと戦うことがあるかーっ！？アホなこと言つてる暇があれば呪文の一ツでも覚えておけー！」

諦め悪いですねネギ……どうかでアラゴンに会いましたか？

「まあドリゴンを倒せるぐらーの強さなら……アルト並みになつて  
おけば大丈夫だ。」

「適当なことを言わないでくれませんかエヴァ？」

「だが事実だ」

それから少し時間がたち

「まあいい今日はここまで解散！」

「ハイマスター！」

そうして今日の修業は終わったのだが

アスナの様子が変だったので

「アスナ……どうかしましたか？」

「どうかしましたかアスナさん？」

ネギと同時に声をかけた。

「……別に……聞いたわよネギ、あんた私に内緒で今日の明け方図書館島へ行つたでしょ」

あれ? なにかアスナ怒つてますか?

「えつ! ?えーと、あの、それは……」

「……何で私を連れていかなかつたのよ。」

「……私も聞いて無いですね……それは」

話してくれればいいのに

「いえ、それはどんな危険があるかわからなかつたし……」

「それも聞いた! ドラゴンだか知らないけどなんかスゴイのがいたんでしょ?」

「せつ もの話しが出てきたドラゴンもそれですか……」

「危ないじゃない！－何で私に言わなかつたのよこ」のガキ－－」

「ガ、ガキつてアスナさん　アスナさんは元々僕たちとは関係無いんですから、いつまでも迷惑かけちゃいけないってちゃんと考  
えて僕　」

ネギ……あなたはバカですか？

「かつ……関係ないつて今さら何よその言い方！－ネギ坊主ーッ！  
？」

本格的に怒りだしましたねアスナ……まあ悪いのはネギですが……

「アスナさん？いえ僕は無関係な一般人のアスナさんに危険がない  
ようにつて……」

「無関係つて－こつこの……私が時間がない中わざわざ刹那さんと  
アルトに剣道習つてるの何でだと思つてたのよーッ！－」

「そんな！－僕別に頼んでないですそんなの……何でいきなり怒つ

てるんですかアスナさん…？」

「何でつてこれだからガキは……あんたが私のことそんなふうに思つてたなんて知らなかつたわガキ！！チビ！！」

「アスナさんこそ大人氣ないですーっ！！年上のくせに怒りんぼ！おサル！！」

「……あなたたち二人仲いいですね」

子供のじやれあいみたいに見えてきた

「な、何ですつてえ毛も生えてないガキのくせに生意氣言つんじやないわよ…！」

聞こえてませんね……

「アスナさんだつてクマパンでパインのくせにーー！僕聞きまし  
たよパイ ンつて毛が生えてないつてことですーっ」

ネギ……それは女子に対してもいけないでしょ？……

案の定その言葉をきっかけにアスナがハマノツルギでネギを殴つて  
どつか行つた

「ア……アスナを……」

「今のはネギ、あなたが悪い」

そんな事をしているとHヴァアが

「……ったく何バカやつてんだガキどもが……ぼーやと近衛二のか、  
お前たちには話がある。帰りはウチに寄つていけ」

そうしてとうとう一時帰宅することになった。

## HKA邸にて（前書き）

アンケート終了しました。

いろいろな意見が集まり助かりました。

発表をお楽しみに……

さて今回セアルトがどんなことを暴露する?

## エヴァ邸にて

あれからエヴァの家に向かい一階の部屋にエヴァ、茶々丸、茶々零、ネギ、このか、刹那、私の七人が集まっています

そしてエヴァがこのかとネギに魔法に関する授業をしています。

「お前達一人の魔力容量は強大だ。これはトレーニングなどで強化しにくい言わば天賦の才、ラッキーだったと思え。」

エヴァが眼鏡をかけながら黒板を使い説明する

「但し、それだけではただデカイだけの魔力タンクだ。使いこなすためにはそれを扱うための“精神力の強化”あるいは“術の効率化”が必要になつてくる。どっちも修業だな。」

刹那と私は椅子に座り真面目に聞いている

「ちなみに“魔力”を扱うためには主に精神力を必要とし“気”を扱うのは体力勝負みたいな所があるんだが」

「

バンッ

机を急に叩き

「人の話を聞け貴様、うーっ……」

「聞いてますよエヴァ。」

全く失礼な

「アルトと刹那はいい……話をしている本人達だ！！」

ネギとこのかは

「あつづアスナさんとケンカしちゃった……どうしよう」

「まーまーネギ君」

泣いて落ち込んでいるネギをこのかが慰めている。

「うじうじしてるとぐびるぞガキが」

「Hガア……言こと過ぎです」

「「つ、でもアスナさんが……」

「ネギ、あなたも落ち込み過ぎでしょ」

Hガアが眼鏡をはずしながら

「フン……貴様等の仲違いは私にはいい氣味だよ。クククッお前とアスナのコンビには辛酸を舐めさせなれてるからな。もっとやれ」

「刹那へどうやつたらHガアを止められますか?」

「知りません。」

「あらら」

それからHガアはJの方向に頭を向け

「Jのかお前にほんま詠春からの伝言がある。」

「父様が？」

ネギを慰めていたこのかが顔をあげる

「真実を知った以上本人が望むなら、魔法についても色々教えてやつて欲しいとのことだ。（あーめんどうや）」

心の中でもんじくわいとか思っていますよね。

「確かにお前のその力があれば偉大なる魔法使い（マギスティル・マギ）を田指す」とも可能だろ？」「

「マギ……それってネギ君の田指しとなる……？」

「ああ、お前のその力は世のため役に立つかも知れんな。考えておくといい」

「うーん

「お嬢様……」

「悩み始める」のか

「まだ考えておくだけでいいんですよ。答えを今急いで出す意味は無いですから」

「次はぼーやだ。」

そしてエヴァはまたネギに視線を向け

「これから修業の方向性を決めるため、お前には自分の戦いのスタイルを選択してもいいつ。」

「戦いのスタイル……ですか」

「つむ。修学旅行での戦いからお前の進むべき道は一つ考えられる。  
二者択一、簡単に言おう」

そこで一回言葉をきり

「まずは“魔法使い”前衛をほぼ完全に従者に任せ自らは後方で強力な術を放つ。まあ私の前回の戦いのスタイルだ。メリットは安定していること……」

「デメリットは？」

「前衛がいなくなれば身を守るものが無くなり負ける……」

まあ確かにぶつちやけ砲台ですからね……

「そして”魔法剣士”魔力を付与した肉体で自らも前に出て従者と共に戦い”速さ”を重視した術も使う。まあ身近なアルトがいい例だな。相手に対して変幻自在のスタイルだ。メリットは一人でも戦えること。デメリットは自身の魔力がきれたらジ・エンド。」

「…魔法使い」と魔法剣士……

「ゲームみたいだな」

カモが言つ

「修業のためのとりあえずの分類だ。どちらもさつき上げたとおり長所短所はある。子利口なお前は”魔法使い”タイプだと思うがな。」

「

ネギが考へこんでますね

「私はどうなんでしょう？」

「……刹那、あなた剣士でしょ。」

そんなことを言つてるとネギは

「ひとつ良いですか？」

「何だ

「サウザントマスターのスタイルは？」

エヴァはこの質問を予想していたのか

「フッ……言つと思つたよ。……私やあの白髪の少年の戦いを見ればわかるように強くなつてくればこの分け方はあまり関係無くなつてくる。が、あえて言うなら 奴のスタイルは“魔法剣士”それも従者を必要としない程強力な、だ。」

ネギが笑顔になる

「やっばりつって顔だな。」

「え？ いえ……」

「ま、ゆっくり考えるがいい。」ののかお前にほもつ少し詳しい話がある。下に来い」

「あ、うん」「解やHugアちゃん」

やつして一人は下に降りて行った

一階に残った私達はネギの拳法の練習を見ていた。

「熱心ですね。」

「おもしれー動きだよな。」

「先日よつと上達しますね。」

そんな会話をしているとネギが拳法の練習を一時休憩して

「ふう……でも拳法じゅドーラゴンには敵わないだろうしなー。魔法使い」と、魔法剣士、かあ……アスナさんどっちがいいと思いません

?

こつちを向いて居ないアスナを探すネギ

シユールですね

やがて居ないのに気づいたのか

……あ、ああ、そ、う、たアスナさん怒らせちゃってたんだ、たーッ

「立ち直りがはえーと思つてたら」

「忘れてただけみたいですね。」

「……ネギ、なんて頭をしているんでしょう。」

すると茶々丸がお茶を持って茶々零と葉加瀬と共に上がってきた。

「ああ、一ヶ月でまた会えるんだね。」

「どうしたんですかーアレ?」

葉加瀬がネギを指差す

「ネギ先生とアスナさんがケンカを……」

刹那がネギに声をかける

「アスナさんは何で怒ったんです?」

「うう、それがわからなくて」

ネギが泣きながら説明する

「アホナガキダナ謝ッチマエバイイダロ。モシクハヤツチマエ。」

茶々零がネギに無茶苦茶なアドバイスをする。

「で、でも僕は何も悪いことした覚えないのに……」

すると葉加瀬が

「そういう時は分析するのが一番ですよ先生。茶々丸そのケンカの音声データ残ってる?」

「ハイ」

セリヒよりやく葉加瀬がいることに気がいたのか

「あの何で葉加瀬さんがここに」

「葉加瀬は協力者ですから大丈夫ですよネギ。」

会話をしている間に葉加瀬は茶々丸からデータを吸いだし

「プリントアウト終了も皆さんどうですか？」

「うへん」

私、刹那、茶々丸、茶々零、葉加瀬が集まつて考える

(一番女心とかわかつてなさーーな辺りが集まつたな)

なんでしょう? カモが今何か失礼なことを言つたような気がします。

「仲間ハズレにされたのを怒つてるように見えますが……」

茶々丸がいうと葉加瀬が

「でもでも危険な目にあわせたくないって気持ちは伝えてますよ。」

「ひつ」

刹那は

「おサル」というのはひどいのでは?」

「それ位でアスナが怒りますかね?」

「あつ……」

茶々零が

「ヤツパリコノ单語ガマズインジャネーカ?」

「……まあ相手の身体的特徴をあげつらうのはよくねーな

カモが相づちをつつ

「えうつでもそれ元々の原因と違うんじや……

「確かに私も言われたら落ち込むかも……」

「私の場合もこれが当てはまりますからね……傷付くのは分かります。」

「えつー?」「」

「アルト……今凄いことをカミングアウトしませんでしたか？」

「 そ う で す か 刹 那 ? ま あ 確 か に 男 子 で は す 」 リー ジ 珍 し こ ら し こ で す  
が ..... 」

「まあそれは置いといてとりあえず原因は「レで決まりかな」

力モがまとめ

「「「「「原因はパイ ンダゼ／かもな／かもです／かと思われま  
す／だと思ひますよネギ」」」」

口を揃えて言う私達に

さうに落ち込むネギ

「アスナさんぼくのコト嫌いになっちゃったのかな」

「そんな……」

「マ、アレダナトリアエズ謝ツチマエヨ。メンドクセーカラヨ謝ツタモン勝チダゼ。ソレカヤツチマエ。」

「確かにまずは直接会つて謝るのがいいと思います。アスナさんならちゃんと聞いてくれますよ。」

「原因がわからなければ本人に訪ねるのが一番の解決策です」

「だからと云つてやるのは黙田ですけどね……」

「う……や……そうですね。まずは僕から謝らなきゃダメですね。よーしそうと決まれば」

ネギが携帯をだし電話するが

「あれ? 通じないな」

「兄貴カードだ」

「あ、そつかーえーと……あ、そ、外行つてきまーす。」

ネギが外に行く

「上手く仲直り出来ると良いですね。アルト」

「あつと上手く行きますよ」

それから数分後

外からアスナの叫び声が聞こえた。

どうやら仲直りは失敗に終わつたらしい。

ヒガア邸にて（後書き）

感想、誤字脱字があれば教えてください

ありますね、海に行きましょう（前書き）

時間が無かつたので凄く短いです

南の島編は多分次回で終わります。

もひすべりやく小太郎が出せるぜー！

あります、海に行きましょう

あれから3日後……

明日は休みですね…………何処かに遊びに行きたいですね

「そんなアルト君に朗報や～」

「何ですか」のか?

「あのなあ、いいんちよがなクラスのメンバー連れて南の島に連れて行ってくれるらしいんよ。」

「ホントですか? 気前良いですね。」

「じゃ、一緒にいこー。」

と、叫びねで

「 「 「 海だー シー。」 「 「

クラスの半数以上のメンバーで南の島に来ました。

「うぐうぐ、これは一体……ネギ先生との一人っきりのパラダイス  
計画が……なな、なぜこんなことに。しかもクラスの半数以上が…  
…！」

いいんぢょどうしたんですかね？

何か悔しがつてますね。

まあ私も楽しまして貰こましょつかね。

「なんで私まで」などこなきやいけないのよ」

「イヤだつたんですかアスナ？」

「まあまあ、ちよーど新聞配達もお休みやつたしねーやん。」

宥めた後私と刹那に小声で

「海で遊べば楽しくなつてネギ君とのケンカも忘れるかも知れんし  
」

「……だといいんですが。」

「やつ上手く行きますかね……あのネギが……」

それから思ひに思ひに自由行動にした。

「アルトは泳がないんですか？」

「……水着を持ってきていらないんで……」

「いいんちよさん頼んでみたらどうですか？」

刹那がじつじつと囁つてくる

「第一海は後が大変なんであまり好きじゃないんですよね……まあ

「この格好も一応濡れても大丈夫な格好ですから……」

今私の格好ですか？

太もも辺りまでの短い水色のパンツと上に赤いパークーを羽織っています。

「まあ今日は海に入らなくても楽しめるものをやりまじょ」刹那。

「ハイ。」

それからじぱらぐして

アスナ、このか、刹那に私の四人で砂浜を歩いていた

「アスナーネギ君もう許してあげたら？」

「かがやつぱつとあざめ

「わ、私の勝手でしょ……」

反応してくる。

「まあ確かにネギも悪いですが……まだ子供なんですから……」

「子供でも言つてこい」と悪いことが有るでしょう……」

そんな会話をしていたら前からいいんちよが……

「た、大変ですわネギ先生が深みで足をとられて……ホントに溺れ  
てつっ！」

一瞬にして青い顔になるアスナ

次の瞬間にはもう

「どうせよーー！」

走り出していた

「アスナー待つてくださいこよーー！」

こつちの言葉も聞かずに走つて行つた。

そして現場につくと

「ネギ！」

「うわああん

海の真ん中でサメ一匹に襲われそうになつてゐるネギがいた

「誰か助けてーっ！！」

「ネギツ！－！／ツ」

躊躇なく海に飛び込むアスナ

「行きますよ刹那！！」

全く……自分のことも考えなさいよアスナ。

「ハイー！」

私達も続けて飛び込もうとした瞬間後ろから朝倉に捕まれた

「落ち着きなつて。正義感の強いアスナにネギ君助けさせて仲直りさせよつて作戦だつてさ ネギ君にも知らせてないけど」

「「や……作戦？」」

刹那と口を揃える

「ではあのサメは？」

「いえ、ただ溺れてるだけだと緊迫感が足りないかと思つて付け足しを……」

ゲツ…………千鶴……

「何か言つたかしらアルト君？」

「何でもありません。」

そんなことを言つてゐる間にアスナがハマノツルギで海を割つた

……そんな効果ありましたっけ？

海が割れた衝撃でサメが海岸に上がつてきた。

あれ？ 中身誰ですかね？

近付いて確認すると

夏美とクーフェでした。

「何をさういふんですか……

「バイトアルよ。」

「どうせ食券50枚とか言われたんでしょう。」

「よくわかるアルね〜」

そうしてアスナたちのほうに目をやると

アスナが泣いていた

仲直り？

あれから時間がたち今は刹那とこのかの三人で釣りをしています。

「……釣れませんね。」

「……釣れんなあ。」

「……そうですね」

一時間三人で釣りをして成果は一匹だけ

「そういえばこのか。」

「ん? なにアルト君?」

「魔法使いに……なるんですか?」

今までの生活がガラリと変わりますからね。

相応の覚悟がなければ。

「うん。ウチ考えたんよ。」おまませつちやん一人にウチが守られてて鬼いんかって。」

「……お嬢様」

「だからせめてウチもせつちやんをサポート出来るへりこにはなりたいんですよ。」

「え、ちやんと考えてるじやないですか。

「だから…………ウチ、魔法使いになる。」

真っ直ぐな目ですね

「なら、鬼いんじやないですか。ネギやエヴァがきっと教えてくれますよ。」

「わうわう~。で、魔法使いになるんやつたらパートナーがいるや

ん。」

「まあ、いた方が良いですね。」

そう答えるとこのかが満面の笑みで

「なら、せつちゃん。キスしよ~や。」

「お、お嬢様！？いきなり何を……」

慌てたせいが釣竿を海に落とす刹那

「せつちゃん……ウチのパートナーになってくれへんか？」

「それはいいんですけど……キス以外で」

「良いじゃないですか別にキスしたって。女の子同士なんですし……」

「アルト……いや、節度を守つませんと……」

「ならネギ君にパクテオーにキス以外のやり方あるか聞きに行かへん?ほり」

セツヒトの手が私と刹那の手を持つてネギの所へ連れていった。

ネギの所へ着くとのどか、朝倉、夕映がいた

「ネギ君、質問なんやけど。パクテオーでキス以外にやり方ないん?  
?」

「INのかさん急にじうしたんですか?」

「うん、ウチなあれから考えてやっぱリ魔法使いになる勉強することにしたんよ。」

「えーっ…。そうなんですか!…」

「うん それでウチせっちゃんにパートナーになつて欲しいんやけど、せっちゃんが女の子同士キスするのはアカンやーんよ」

「／＼＼＼＼いえつその……」

「ウチは別にえーんやけど……」

「刹那は頭が固すぎます。」

「ならアルトはネギ先生にキス出来るんですか！？」

急に話をえてきましたね

「まあ、仮契約のためならそれぐら……第一ネギは子供ですからね。」

「なつ……」

何か絶句してますね。

すると朝倉が

「良いじゃんキスくらい。みんなふざけてキスくらうするぜっ。」

「い、いえやはり節度は守らないと……」

そんなこんなでガヤガヤやつているとカモが

「ふむしかし、いきなり仲間が揃つて来やがったな。こいつなかなか戦略の立て甲斐があるぜ」

「何を言つてるんですかカモ?」

「いやアルトの旦那。今後の戦略を少し……一人が魔法を勉強して今後使いモノになったとすると……兄貴はまだ魔法使いか魔法剣士か確定してないから保留にしてのどかの嬢ちゃんは読心術で補助だから後衛。夕映つちはまだ未定と……このかは回復魔法などで後衛か……」

「後衛はなかなかですね」

「ちょっとカモ君勝手に……」

「で前衛は刹那にアルトの旦那で……」

「私も入ってるんですか？」

「朝倉の姉さんは諜報遊撃手として……うーん前衛が一人か……」

「ちよつと足りなさ過ぎませんか？」

「やつぱりそいつすか？ なり古が師にいつちよ頼むにしてもやつぱり……」

「うーんやつぱりアスナが入りますね……」

「ああアスナの姉さんがいねーと格好つかねーな。 絵的にも戦略的にも……」

「ハッそつだアスナさんー！」

まだ仲直りしていなかつたんですか？

「僕アスナさんに謝りにいかなきやーつー！」

「こつてらつしゃいネギ。頑張つてくださいねー」

「分かりましたアルトさんー！」

そうして走つていった。

さて部屋に戻りましょうかね……部屋割りみないと……

「あ、アルトは私とお嬢様と一緒にですよ。」

「そうですか……つておかしいでしょーーー！」

「何処がですか？」

「別にウチもアルト君なら一緒に良いでーーー！」

なんか「」でも動かなそつですね」「の一人……

部屋に着くと……

「ベッドが一つしか無いんですけど……」「

「確かに……」「

「あ、ならウチ別の部屋に行くわ。あへ行へる」か

やつ言つて出でこいつするのか

「あ、待つてください。出るなら私がネギの部屋に行きますよ。  
そう言って荷物を持って移動しようとしますが

「アルト君……ならベッドを一つだけ三人で寝ればいいんよ……」「

このかがどんでもなことを提案してきた。

「「な、何を言つてゐるんですか」このか／お嬢様ー!？」

「えー三人で寝よつや／それなら全て解決やん。」

そう言つて反論を許してくれなかつた。

やつして三人で川の字に並んだ

順番は、私、刹那、このかで並び寝ました。

朝になると「このかと私は刹那に抱きついて居たのはお約束ですね…

⋮

**仲直り？（後書き）**

明日は更新出来るか分かりませんが頑張ってしたいと思います

EX：story 夢？（前書き）

書きたくなりました。

セイバーって確かにライオン好きだつたなあ～って思つた時にことあるゲームの攻略本が目の前にあつたので書いてしまつた……

まあ何かの伏線になると想ひます……

ちなみにこの話に出てきた一人は多分もう出ないと想ひます……多分……

## EX：story 夢？

「これは夢？」

気が付くと一人で女の子を背に背負い端の見えない橋を歩いている

……

……「これは私じゃない？」

体が勝手に動いている

何故？

すると頭に男の声が響く

（リノアの声が聞きたい……）

それに倣つように女性の声が

（なあに？スコール）

スコールって誰ですか？

するとまた声が頭に響く

（何時もは俺が望まなくつても、リノアは話しかけてきた。）

（おハローーースコール。今日は何をやるの？）

(目があえば微笑んだ。)

(エヘヘ／＼＼＼＼私不器用何だよな。)

(だから俺はそれが当たり前になつていた。)

(今日も元気に行つてみよー!)

(でも)

(あのね、スコール)

(もうリノアは笑わない)

(寂しいなあ)

(おれに話しかけて来る」ともない。)

なんなんですかこれは!!

聞きたくない！！

(ダメだったの、一人じゃダメだったの)

(人形のよう  
冷たくて……  
動かない……)

(ただ生きているだけ)

「……から私を出して……！」

(リノアがその状態になつてよつやく俺は気づいたんだ。)

(なんか、うれしいぞ～)  
この男は後悔してるんだ……

(リノアの声が、)

(今のうれしい～ウソでもうれしい～)

(動きが、)

(えい！パンチ)

(微笑みが、)

(ような気がしましたあ? )

(俺にとつてどれほど大切だったか……)

大事な者を無くして…心の中で泣いてる

(ガルバディアガーデンに攻め込んだあの日)

頭の中に戦いの風景がよぎる

(ママ先生 魔女イデアを撃ち破り、そして)

すると一層心の中が暗くなる

私とこの人は今精神が繋がっている?

(リノアは倒れた)

感情が流れてくる。

(何が起こったのか、)

(ねえ、楽しい?)

(誰にもわからなかつた。)

(いつもでも冷静な判断で仲間の希望を否定して楽しい?)

この人は孤独だったの?

(正気を取り戻したママ先生にさえ。)

(リノアの身体だけが、)

(時を止めたように横たわっていた。)

それ以上考えないでください!!

(すべては、終わってしまったのだろうか。)

なら何故貴方は前に進むのですか!?

(良く笑う、)

(へへへ／＼スコール!行こ!)

(おせっかいで怒りっぽいリノアはもう一度と帰つてこないのか。)

(起きる～スコール～)

(俺にはもう、)

(起きないと私が布団に入るぞ。)

(みんながリノアの事を考えるのをやめてしまったよつて思える。)

(“過去の人”といひ記憶の引き出しこじまに込まれて、)

いや、この人はまだ諦めて無いんだ。

(リノアもやがて過去形で好き勝手語られるのか?)

(自信たっぷりって顔だね!)

(そんなのはイヤだ。)

守りたいんですか?

(たとえ世界に俺一人だけでも、終わってないって信じたい。)

(て、てれるぜーーーーー)

(リノアを諦めたくない。)

(私のことが……好きになれる、好きになれる。  
ダメ?)

(だから俺は今歩いているんだ。)

(いいよん)

(この人は孤独じゃない……

(Hスタへの遠い道を)

(行くぞ、スコール!)

(エルオーネなら、)

孤高の……

(あの日のリノアの運命を変えてくれるかもしねりないから。)

(ちがうのちがうのー!)

獅子

(陽光に輝く海と、ビーチでも続く道。 )

( ものじもじゅう、 ものじもじゅうひー。 )

(風がリノアの黒髪をなびかせて、 )

( あ、 ロンサートへ、 ござ行かん。 )

(俺の面に当たる。 )

( Hへへ／＼でもまあ、 同じ指輪してたらみんなに誤解されちゃうね )

( 神戸からね、 )

( まめ～つーありがたきしあわせー。 )

( ほのかな体温も伝わって来る。 )

( ほなわたしでは、 こまますが、 .....一緒にこねば、 スコール様

も考え込まなくてすむかな、と思つたわけで、」やります。）

（モウヒー）

（いかがでしょう、スコール様？）

（リノアは疲れて眠つてゐるだけで、）

孤高の獅子……だけど……

（またまた、おハローー）

（俺が重いと言えば、）

この人は今……

（飛び起きて怒つてへそをまげるんじやないか……）

“一人”じゃない

（そんな風に考えたら）

“孤高”なのに…

(視界が少しほやけた。)

“仲間”がいる

(俺は変わったと思う)

あつといこの人はこの背中に背負つてゐる女性のおかげで

(リノアのおかげで。)

(やつたー!)

獅子の心を持ちながら…

(リノアが目覚めてくれたなら、俺はもっと変われると思う。)

孤高じゃなくなつたんだ…

(話したいことが、)

だから」」や……

(たくさんあるんだ……)

諦めたく無いんだ……

(今度は……)

」の女性のおかげで、孤高の獅子」は……

(もつと素直に……。)

「仲間を譲る強き獅子」になつたんだ……

(リノア……。)

(スコール……)

そうして私の視界は白く染まつた。

「…………おい…………」

誰かの声が聞こえる…………

「…………おい…………」

エヴァ？

「アルト起きる……」

「何ですか？人が寝ているのに…………」

「泣いていたからな…………」

私が？

「泣いていた？」

そうして鏡を見てみると涙の後が確かにあった。

「それとアルト」

「……何ですかエヴァ？」

「そんなネックレスしていたか？多少の魔力を感じるんだが……」

そつ言われ首もとを見ると獅子を模したネックレスがかかっていた。

“グリー・ヴァ”

ふとその名前が頭をよぎった。

「……獅子の心」

「……どうしたんだ？」

「いえ、さつとここれは神様からの贈り物でしょ。」

「 神様ねえ……」

むつ

「 疑つてますね？」

「当たり前だ！…サアはけ。吐くまでここから出さんぞー！」

エヴァがドアの前に立つ

なら、

「窓から出ればいいんですよ。」

「なつー…?」

……獅子の心

……氣高い誇り

仲間を譲る強さ

「手に入れて見せますよ……仲間のために……」

とりあえず

「今日一回をびいかつて過りしあつかね?」

刹那の所にお邪魔しましょ。

やつじて一回がまた過るべく

## EX・story 夢？（後書き）

ネックレスは魔力を帯びている……

ハイ、多分武器になると思います。

仮契約とは別に武器が欲しかったんですよ

麻帆良祭の時にヒーローゴニットとしてエクスカリバーはちょっと  
注目浴びすぎるかなあ？って思いまして……

ちなみに仮契約時にでるアーティファクトは武器では無いですよ  
楽しみに待つてください。

新しい武器はまあこの話に出てきた人物の昨年が分かる人には分かりやすいかもしません。

銃と剣の複合武器ガンブレード

名前 ライオンハート

ネックレスにアルトの魔力を流すと現れる。

切る瞬間にトリガーを引くと衝撃で威力がます。

刀身の色は青

魔力の流す量により切れ味が変わる。

扱いは難しい……

宝具としてのランクはBランク辺り

また、設定の部分に詳しくのせておきます。

次回からは本編を進めますね

別荘？（前書き）

今回から『』の作品に出でてくるキャラがいろんな名セリフを大分交換していく場所になります。

僕は……殺したくなんてないのに

《ガン ムSEE D キラ・ヤマト》

私は……ピーマン嫌いです

《駄々っ子アルト》

我が儘言わずに食べんか！！

《監の保護者？エヴァ》

せつちゃん？なにどもくせに紛れてのこじとるん？

《怒ると怖いお嬢様こののが》

エッ！－いやこれは……

《嫌いなものを残した所を見られた神鳴流剣士 刹那》

別荘？

平日 学校の授業

ネギがやつれながら授業をしていく。

「で、では 次の所を……四葉ちゃん」

「ねえ、ネギ君疲れてるってゆかヤツれてない？」

「五月病か？」

「気の早い夏バテとか」

クラスメートたちもネギの様子に気づいている

キーンゴーンカーン……

授業終了のチャイムがなる

「じゃ、じゃあ今日せいやもでこ…では~」

そう言って教室のドアに向かって歩き始めるネギ

すると

「ゴンシ

「アウシ

ガンツ

「へふり

黒板とドアにぶつかっていく。

するとアスナが

「たつた二三時間の練習でみんなになつたりやつなんて絶対おかしいわよ。何やつてるかつきとめてやる」

そんなアスナに賛同するのかのどかたちも

尾行するよ。うだ。

付き合いくれませんね。

まあやつてこるのは普通の修業ですか……せつとこてもなにか無い  
でしょう。

それで、今晚の料理は何にしてしまうかね？

そう考え私はスーパーに食材を買ひに行つた。

スーパーに着いて食材を吟味する

「このスーパーは交渉しだいで値段が安くなるので良く利用するんです。」

「おや、アルト嬢ちゃん久しぶりだな。」

「嬢ちゃんは止めてくださいって何時も言こますよね親父さん?」

「まあ良いじゃないか……若い娘と話せるとおじいさんのテンションは上がるんだよ。」

「まあ良いですナビ……このキャベツ。虫に食われた後がありますね……一畳田にかけてくれません?」

「おいおい、無農薬の証拠だぜそれは……だが良いだらうござり其他の物も買つてけばな。」

「……商売上手いですね、良いでしょ？あのセリの段ボールの中にあ  
るトマト全部買っちゃおう。」

「まごどもつ……。」

やつして買い物を済ませトマト邸に帰る途中

結界に侵入者の気配がした

「取り敢えず荷物を置いてからですね」

の剥ぎの剥

家に帰るとトマトが居なかつた

もう行つたんでしょうか？

ネギの魔力も移動していますし……取り敢えずネギと合流しますかね。

もしかしたら新しい武器も試せるかも知れませんし……

力を貸して下さいね

“グリー・ヴァ”

世界樹広場に着くとネギがちょっと年齢のいった老人と戦っていた。

「僕が……僕が戦うのは

「一般人の彼女達を巻き込んでしまったといつ責任感かね？助けなければとこゝ義務感？」

そこで老人は一回言葉をきる

「義務感を糧にしても決して本気になどなれないぞネギ君……実に  
つまらない。いや……それとも君が戦うのは……あの“雪の夜の記  
憶”から逃げるためかね？」

「え……」

記憶？

ネギの過去でしきりか……

「な……なんでそれを……ち、違います僕は……」

「そりかね？では……」

そう言つて老人は帽子を脱ぐ

するとその下から悪魔が現れた

「コレなどはいかがかね？」

あの悪魔……ネギに関係あるんですかね？

氣付かないウチに手に力が入つていた。

「はつはつは……喜んでもらえたかな、いい顔だよネギ君。その表情だ。いやあ今時、ワシが悪魔じやー」と出でても若い者には笑われたりしてしま「からねえ」

「あ……あなたは……」

「そうだ君の仇だネギ君。あの日召喚された者達の中でもいへわざかに召喚されは爵位級の上位悪魔の一人だよ。」

するとまた帽子をかぶり直し

「君のおじさんやその仲間を石にして村を壊滅させたのもこの私だ。  
あの老魔法使いには全くしてやられたがね。」

見てわかるほどネギに動搖が走る

「どうかね？自分のために戦いたくなつたのではないかね？」

すると一人の少年がネギに近づき

「ネギ！大丈夫か？オイネギ！しつかりせえ！－ネ……！？」

その瞬間ネギの姿が消えた。

ネギはあの老人のすぐ田の前にいて空中に打ち上げ追撃する

「な……何やあの動きはーー?」

……魔力の暴走

！」まで出来るとは……だけどネギ……その戦い方はダメですーー。

気づいたら体が動いていた。

ネギが追撃をしていると一瞬の隙をついて悪魔の姿に戻り何かをし  
ようとする

あれは……石化!?

間に合ひえーー!

ネギの元に走り突き飛ばす

なんとか避けましたか

「ネ」

「兄貴！？」

すると暴走が落ちついたのかネギが自分の手を見ながら

「あ……ア……ほ 僕……今……？」

「……シ……まつたく……」

「オイ大丈夫か？」

少年が近づいてきてネギを心配する

私は頭から少し血が流れていますが許容範囲でしょう

あるとよしやくひちに気づいたのか

「あ、アルトに小太郎く……」

「！」の……アホかーつ！…

少年がネギの頭を殴る

「へふ」

ネギが殴られた頭を押さえながら

「！」の……小太郎君！？

「アホ！…いくら力があつてもあんな闇雲に突っ込んでつたら返り討ち喰らうんは当たり前や！…」

「そここの少年の言つ通りですよネギ」

「確かにお前の魔力の底力がスゴイのはわかつたわ！…わかつたけどな今戦いは最低や！…周り見えてへんし結局決め手も入れてへん！…あんな力押し俺でも勝てるわ！…つたく頭良さそな顔しとるくせに！…仇か知らんけどおっさんのお挑発に簡単にキレよつてからに！」

そして少年がネギの頬をつねる

「アホ」

「むぐぐぐーっ！…」

「共同戦線ゆーたやるー一人であるおつせんブッ倒すで」

「……一人つて私は？」

「あんた女やろ？女は下がつて見とき。」

「…、小太郎君……アルトは男だよ」

「…………え？」

あ、その顔面白い

「な、なら三人で、や。」れならいいやひ。」

「……そうだね小太郎君」

「分かりました。」

「ふん……もう終わりかねネギ君」

今まで黙っていた悪魔が話しだした

「今のは大変良かつたのだがねえ……はははいい仲間が出来たようだ。だがどうするかね？君達三人で私に勝てるのかな？」

ザツ

構えを取る

「ネギ今の最強モードみたいのまたいけるか？」

「い、今の自分でもどうなったのか……アスナさんが捕まっている限り魔法が効かないっていうのも厄介だし……」

「まあそうでしょう。正直私も新しい武器として……使い慣れて無いから足を引っ張るかも知れませんね。」

すると今まで捕まっていたこのか達の方から魔力反応が起きる。

水の檻から脱出した朝倉がアスナのネックレスを引きちぎる。

「今だネギ君ーー！」

「みんなーー！」

「やるやないかねーちゃん達ーー！」

「流石ですね。」

もう一度構え直し

「へへへっ……もういくしかないねーー…とつておきのやつがあるー。  
小太郎君、アルト前衛頼める！？」

「当たり前ですーー！」

「ナメンなやーお前にそ大丈夫かいなー！」

「ふふふ… やるじゃないか」

相手も構えを取り

「いいぞ！ 来たまえ！！！」

「おっちゃん何笑つとんや！！！ もう魔法は……防げんのやで……！」

「行きますーー！」

小太郎が分身し突っ込んで行く

しかしその分身もすべて吹っ飛ばされる

「どきたまえ小太郎君。 私の狙いは……」

「がつ……」

最後の小太郎が吹き飛ばされ

「ネギ君唯一人だよーー！」

そしてまた石化の技をしようと構えるが

「甘いです！！」

そこに青い刀身を持つ剣を持ったアルトが斬りかかる。

「グッ……だが」

それすらも避けネギに技を放とうとするが

「いっちはん本体やおっちゃん」

足下に小太郎が構えており  
掌底を放ち

「アルト！」

敵に隙を作り

「ハアツ！」

その隙を狙いアルトが剣で片腕を切り落とす。

「ネギ今ですー！」

さらりと続けてネギが

「魔法の射手雷の一矢！！攫打頂肘！！」

吹き飛ばし

「ラス・テルマ・スキルマギスティル来たれ虚空の雷薙ぎ払え」

呪文を詠唱する

「ぬううう」

「決めろネギーー！」

「やつになこねギーー！」

「うわあああーー！ 雷の斧ーー！」

辺り一帯に雷が落ちたような衝撃が走る。

煙が晴れ

横たわっている悪魔が

「……君達の勝ちだ……アドメを刺さなくていいのかね?このままにすれば私は唯、召喚を解かれ自分の国へ帰るだけだ……しばしの休眠を経て復活してしまつかも知れんぞ?」

「…………僕は…………」

「君のことほ少し調べさせてもらつた。君が日本に来るまえに覚えた9つの戦闘用呪文のウチ最後に覚えた上位古代語魔法。そのための呪文のハズだぞ?本来封印することでしか対処できない我々のよう高位の魔物を完全に討ち滅ぼし消滅させる超高等呪文。君が復讐のために血のこじむ思いで覚えた呪文だよ。」

「…………ネギ…………アドメをすんですか?」

ネギは首をふり

「……僕トドメは……刺しません。」

「……ほひ」

「六年前……あなたは召喚されただけだし……今日だつて人質にそ  
んなひどいことはしなかつた。それにあなたの方こそ本当の本氣で  
戦つているように見えませんでした。僕には……あなたがそれ程ひ  
どい人には……」

すると老人が笑い

「どうかな?やはり私は全くの悪人かも知れぬぞ。何せ悪魔だから  
ねえ。」

「悪人がそんないい顔しますかね?」

「お嬢さん……いるかもしないだろう?」

「まあね。それと私は男ですよ。」

「本当に良いのかね?」

最後の確認のようにネギに再度問う

「トドメは刺しません。」

「…………ふふふはははネギ君。君はとんだお人好しだなあやはり戦いには向かんよ。」

笑いながらそう言いこのかを指差す

「コノエコノ力嬢…………おそらく極東最強の魔力を持ち…………修練次第では世界屈指の治療術師ともなれるだろう。成長した彼女の力をもつてすればあるいは……今も治療のあてのないまま静かに眠っている村人達を治すことも可能かもしけぬな」

「…………」

「まあ何年先になるかはわからんがね。」

「…………！」

老人の体の大半が消えていく。

「ふふ……礼を重ひておひつけギ君。いざれまた成長した君を見る  
日を楽しみとかねよ。私を失望させてくれるなよ少年」

そつまつて完全に涙を涙した。

次の日

世界樹広場

ネギが手すりに座つて落ち込んでいる。

「ネギ君昨日からずっとあんな感じなんや。相かたづらこじ心配や  
わあ……」

「まがが心配をしている。

「まあ昨日の今日ですから……そつとしておくれのが……」

「……ネギ」

すると

「オーネギー・・・」

「ネギー・・・おはよー、」

「ん？」

「何朝からボーッと阿呆ヅリしてんやシヤキッヒセドー！」

「」

いきなり小太郎の右ストレートがネギを襲つ

「オツス」

「小太郎……出会い頭に右ストレートはどうでしょ、つか……」

「えー やんか男同士だし……それより聞一てやネギ、本山の反省室から脱走したの今回の件でチャラになつたわ……」

「ええっ ホントに? 良かつたね。」

「学園長が西の棧に掛け合いましたからね……それよりネギ……元気がないですか……大丈夫ですか?」

「えつへ~! うんそんなどないよ」

すると決心を固めたように

「……くく……アルト、小太郎君……僕……魔法剣士……にする」とことこしたよ……」

「何つー? マジかー? 何でやイキナリー?」

「本当ですかネギー?」

「あれ、魔法拳士かな？いや何でってその……昨日小太郎君とタッグ組んでちょっと楽しかったしアルトに憧れて……」

「せやるせやるなあ……男はやっぱ接近戦やで……」

「…………憧れ…………ですか…………なら早速模擬戦ですね」

「おひつ……勝負やネギ……」

「ええーーーー今からーーーーちょっと……実は昨日無理したせいか身体中痛くて……」

「何イーーー?ケガなら昨日このか姉ちゃんのアーティファクトで治してもらひたやろーーー!」

「もううですよネギーー仮病は許しません。」

「あははは まあ新しい友達もできたみたいやし、心配ないかなあ」

「そうですね元気は出たようですが……悪友といったカンジですか……アルトとも近づけたようですし」

## スキット集 弟子入り後～麻帆良祭準備前（前書き）

え

言い訳はありません。全て作者の私が悪いだけです。

更新を待つてくれた人

ホントにすみません？

これからは前回のように毎日更新……とまではいかないと思います  
が出来る限り早く更新していきたいと思っています……

いや、早くに更新します

次の更新は明後日までには……

今日の所はスキット集で、

では

スキット集 弟子入り後～麻帆良祭準備前

英語の授業中

ネギ「えっと……アルトも『れぐら』のなら読めるよね？」

アルト「もちろん。舐めないでください」

刹那（本当に大丈夫何だろ？）

アスナ（流石に『コレは……私でも読めるよ』）

このか（でもアルト君やし……）

クラス全員（（（（こくらなんでも『れぐら』……）（）））

アルト「Hー・Pー・Pー・エル・イーですー！」

ネギ「アルファベットを読むんじゃなくて、単語で読んでください  
！…！」

クラス全員（（（（その読み方を自信満々でいつたあ…！）（）））

英語だけは壊滅的にダメなアルト君

### 放課後の廊下

このか「なあなあアスナ～、なんかウチらの教室から声が聞こえるんやけど……」

アスナ「え？……ホントだ。でも……」んな時間まで残ってるなんて誰かしら？」

このか「確認しひくん？ウチちょっと氣になるわ。どうかで聞いたことある声やし……」

アスナ「そ、そりね。（何か面白ことだと思つて……）」

アルト「刹那、ほ、ホント」……良いんですか？／／／／

刹那「ええ。こんなこと頼めるの……あなたしか居ない／＼／＼／＼

アルト「で、でも！－！刹那にはこのかが！－／＼／＼／＼

刹那「このかお嬢様に……こんなことは頼まないから。」

刹那「私は、あなだから……アルトだからこんなことを頼むんです。」

アスナ（え？ なに？）の光景？）

このか（せつちゃんがウチに頼めない事つてなんやろ？）

アルト「……」

刹那「お願いだから……私の宿題手伝ってください－－」

アスナ・このか（そんなことなの／かい！？）

アルト「だから宿題の手伝いを私に頼んでも意味無いでしょ？同じ学力程度なんですか？……？」

刹那「いえ、アルトは英語だけで点数を落としているだけで後は平均以上じゃ無いですか！」

「のか」（宿題ぐらになら手伝つのこと……）なあアスナ」

アスナ「なに。」

「のか」帰る

アスナ「……そうね」

宿題を手伝つて貰おうとアルトに頼みこんでいる刹那

エヴァの別荘で……

アルト「～～～」

エヴァ「どうしたアルト？鼻歌なんか歌つて？」

刹那「確かに珍しいですね。何か良いことでも有ったんですか？」

アルト「ん？ 実は今日八百屋さんでオレンジが安く売つてたんです！」

エヴァ「オレンジねえ」

刹那「それがどうかしたんですか？」

アルト「どうかって…… オレンジですよ刹那！！甘い！！美味しい！！体に良い！！の三拍子揃つた究極のフルーツじゃないですか！」

刹那「究極って……？（ビタミンCが豊富ぐらいいじゃないですか？）」

エヴァ「刹那、コイツはオレンジが大好きなんだ。だからなにを言つても無駄だ。」

アルト「~~~~~ 今日の夕御飯はオレンジパスタ～」

刹那（お、オレンジパスタ！？）

エヴァ（またあの甘いパスタの日々が続くのか？）

修業の間の休憩中の会話

学園祭準備 わの1

朝8時

3—A教室内

ふわあああ

最近夜遅くまで起きていることが多いせいか寝不足ですね……

「アルト、眠そうだが大丈夫か?」

エヴァですか……

「正直……眠いです。」

「フン、夜遅くまでゲームをしてるからそういうんだだ。」

そう言いながら何かを手渡していくエヴァ

なんですかコレ?

「メイド服?…………ですよね

「ああなんか『コレ』に着替えて教室に入つてくるボーヤを齎かすらし  
いぞ。」

なるほど

「コレを着れば良いんですね。分かりました。」

着替えてから少し時間がたつ

「もうそろそろネギ先生がこいつしゃいますわね。皆さん、準備は  
良いですか?」

いいんちよがメイド姿で確認する

「…………」

「…………」

みると

ガラツ

「おせむり」だつた

教室のドアを開けてネギ先生が入ってきた

満面の笑みを浮かべながら迎える

慌てるネギに対していいんぢょとゆーなが理由を述べる

—3— Aの出し物が“メイドカフェ”に決まりましたの」

「ウチの学校お金儲けしていいからね！お小遣い稼ぐならアレだよ」

拳をあげながらゆーなが熱く語つたあと

「私は、メイドカフェがどういうものかよくわかりませんが皆さんたつての願いで衣装を御用意させていただきましたわ」

(（ふつふつふバカと金持ちは使こよつ……）

悪どい顔をしているゆーなどパル

まあ良いでしょう

そして流れからかみんなネギを相手に接客練習を始める

私は刹那にこの格好を見せてきましょつかね

「刹那～」

「あアルト、おはよウイ〜ヤ〜こまつて！？なんて格好してるんですか  
！～／＼／＼」

「え？どこかおかしい所ありますか？一応着方に間違いは無いと思  
うんですが……」

その場でクルツと一回転してみる

「アルト君かわええなあ

「ありがとう〜ヤ〜こます〜のか

そんな他愛もない会話をしていると刹那に

「猫耳スクール水着……」

「えつ？意味がよく……」

理解できませんと繋げたかったのでしょうか

そのままカーテンの向こうに連れていかれた

そしてすぐ

「……／＼／＼／＼

顔を真っ赤に染めて猫耳スクール水着で出てくる

なるほど頬の部分をひらがなで書くところがポイントが高いんですね

「やりすぎたか……」

「うん……」

朝倉とう一ながらそんな声が聞こえてくる

さうしてネギがいた方からは

「一〇万円」

「は…はー」

クーがネギにどう考へても暴利な値段をふつかけいた

「可愛いですよ刹那

「あ、そうですか……／＼／＼／＼」

バンッ

いきなり教室のドアが開きその先には新田先生が……

「お前ら朝っぱらから何をやつとるかーっ……」

「ひいい…？」

「新田先生私達はマジメに学園祭の出し物の討議を……」

「もうHRは終わつたるーーネギ先生もネギ先生です。」

「ウニ」

「全員正座——！！」

わ、私もですか？

その日は結局それ以上のことは進まなかつた

次の日

寮にある刹那の部屋を朝つぱらから訪ねる

「刹那、朝ですよ」

ドタドタドタ

ガチヤ

「あ、おはよー!」ゼーこますアルト。お待たせしました。」

今日は朝から屋台に食べに行く予定なんです。

「あ、このかお嬢様の部屋に行きましょうか」

「ハイ」

ネギたちも早く起にして行かないといと……

「よーしー・今日は遅刻しないで済みそうね」

「毎日いいやつだーのこなあ」

走りながらアスナとこのがが会話をしている

よく歯を噛みませんね

「遅刻じゃなくても走るんですね」

刹那……今どうですか

「でも」「こんな早く朝」せんも食べず」「出でしゃべりしたんですか？」

あれ？

「ネギは聞いてないんですか？」

「昨日書いたの忘れてたのよ。実はね学園祭準備期間中の名物があるのよ」

アスナが謝りつつネギに説明をする

「ネギ君！」

このかが指さす先に超包子と看板が出た屋台電車が止まっていた

口を開けたままネギがみてくる

なかなか繁盛していますもんね。

「あ……ネギ先生」

するとウエーテレスをやっていた茶々丸が此方を見つけ、両手に点心の器を持ちながらこちらに一礼してきた

そして空いている席に案内をしてもらごとに座る

「ベーチャオさん達の屋台ですかー」

「ネギもチャオ一味の点心が美味しいの知ってるでしょ。毎年大人気なのよ」

「ウチらもファンやから学園祭の時は早起きして食べに来るんよ。」

「私も学園祭の時は利用しますね。」

「あれ? アルトは?」

「去年は店側でウェイターをしてました。」

そうやって会話を楽しんでいるとネギの目の前にスープが置かれる

「どうだ?」

「どう?」

そんな音が聞こえるような笑顔で四葉さんが持つてきていた

「あ、どうも四葉さん」

「えーなーネギ君だけ」

「このかが羨むよ！」

「まあまあこのか。なんなら私が斬りますから」

「ホンマにー？」

「サービスの特製スタミナスープ……元氣出ます」

四葉さんはネギにスープの説明をしていく

「あ、はー」

「あの……修行頑張つて聞いて聞きました……べーセんから。でも……無理はダメです……体壊すし……」

「体が資本！ 健康第一です！ ……」

手をぐつとしながらネギに語る四葉さん

「ハイ……あの……どうして僕だけサービスを……」

疑問に思ったのかネギはそう聞いた

「最近元気がないよいにみえたので……修行大変そうですが、お仕事も頑張って下さい……」

そう言つて去つていった

会話の間に注文していた点心がテーブルにどぞいていたため私たちも食べ始める

「いい人ですねー四葉さん

「あん、ネギ君今さら何言つとるんー

「四葉さんはスゴイ人ですよ。料理は達人だし」

「人を気遣う心も持つてますから」

「あんた先生なんだしあんと生徒のこと把握しきなきよ」

そしてスープを一口のんでも何かあつたのか

「よーし！—ウチのクラス結局出し物決まってないし！朝のH.Rから先生の仕事がんばるぞーッ！—！」

「わ、何よ突然？」

「おおネギ君が燃えどるー？」

「まさかスープパワー？」

「何ですか刹那。スープパワーって？」

そんな風に朝の時間は過ぎていった

## 学園祭準備 その1（後書き）

なんとか予告通りに更新できました。

次回は……17日までには？

アルト「誤字、脱字、が合つたら教えてください」

## 学園祭準備 わの2（前書き）

予告した日より遅れてしましました  
すいません

次回は23日までにはなんとか……

## 学園祭準備 その2

### 3-A 教室

「えー、それでは皆さん。学園祭の出し物を何にするかですが……」

教卓でネギが出し物について意見を聞いていく

「いや、しかしそいつは難しい問題ですぜネギの親分」

「ああメイドカフェを越える集客力となるとねえ……なかなか」

ゆーなど朝倉がため息をつく

いや、別にメイドカフェじゃなくとも……

「ハイハイ……！」

「さ、桜子さん」

桜子ですか……いい案を出してくれると良いのですが

「…ドキッ 女だらけの水着大会・カフェ…がいいと思いまーす」

クラスの大半が転げた

「何なのよソレ…意味わかんないわよー…。「えーフツーに楽しそくない? ポロリもあるよ」くないわよつ…」

アスナが突つ込むが

「「…それだ」」

ゆーなとパルが賛成するが

「「うそつけー！！」」

反対する人もいる

「じゃあじやあ、女だらけの泥んこレスリング大会喫茶」…」

まき絵がまたバカの意見を…

「ネ」「ラゾクバーツ」

双子の片割れの風香が外見に合わない意見を…  
意味わかつてるんですけどかね？

「もう素直に、ノーパン喫茶、でいいんじゃないから？」

千鶴……その意見はため息をつきながらいうものではないでしょう

……

「「「それだああああーーーー！」」

「それだあじやないわよーーーーどんな喫茶なのよーーーー訳わかぬいわよーーーー！」

「80年代に実在したと記録にありますが」

「あつたんですか茶々丸?」

「しかし今は違法のようです」

「何歳なんだおおばはん」

「ダメツ千兩それ以上は」

「おば……?」

「「ひつ」」

「いつの間に私と千兩の後ろに?」

アツ

それからこうこうあつたのか

私が千鶴の制裁からよつやく解放されるとパルが

「確かに……カワイイ女の子を見せ物にするところはこせわか單純かも知れないわね……だけど逆ならいいんじゃない?」

「「「おおつ」」

「じゃアルト君をノーパンに!」

その壇をきっかけにみんなが私の周りに集まる

「ハ？ちょっと待つてください……上着のボタンをせわしないで！…パンツは、パンツはダメです……ですがにそれは」

「ユリーお前、朝っぱらから何を……」

新田が現れた

終わった……

もううんそのあと壇で説教をくらいました

「うう……ひどい目にありました」

説教が終わつたあとアスナたちの所に行くと

「あーデンマーイ

「『メンなあ皆止められなくて』  
「肌白かつたですね。」

「アスナとのかは慰めてくれるのに刹那だけは着眼点が違いますね。」

「い、いやでも思つたことを言つてこるのであつて……」  
「……刹那のえつち」

「なつ！／＼／＼／

いやでも

「ネギも大変でしょうね。このクラスを纏めるのは難しいでしょ  
うし……」

「出来る限り手伝つてあげたいんだけどね」

アスナが頬をかきながら呟く

「ウチらだけじゃなあ」

「ネギ先生になにかきっかけがあると良いんですがね」

今日はセミでお開きになつた

次の日

「えーそんな訳で……」

昨日とはうつて変わって次々と物事を決めていくネギ  
何があつたのでしょうか？

「なかなか決まらないのでみんなのアイディアから僕が厳正に選考  
と抽選した結果、3—Aの出し物を“お化け屋敷”に決めたいと思  
うのですが、ど……どりでしうつか？」

「　　」

クラス中が静かになり

「あ……」

ネギがうろたえる

すると何人が立ち上がり

「　　いいんじゃない？」

「まあ一いつ……いつも決まれば思いつあつ怖い奴を……。」

「お化け屋敷なりお化け屋敷で色々やつよつはあるつてもんよ。」

「いやそれだけだとつまらんからまつば、ヌーディストお化け屋敷  
……。」

「それだー！アルトを脱がせーつー。」

「嫌ですよ」

「お化け屋敷か……アルトの衣装は黒の『スロリだな

「了解ですマスター準備しちゃまー」

## お知らせ

再開したばかりのこの小説ですが少し作者の都合で次回の更新を9月1日にさせてもらいます。

理由は……作者が夏休みの課題をほとんどやりていらないのと少しの間家にいなくなり落ち着いて書けないからです。

作者の他の小説はストック分があるヤツは更新するかも知れません

9月1日には本編を更新したいと思います

9月にある作者の就職試験が合格だった場合10月からの更新は多少早くなると思います

誠に自分かつてな言い分とは思っていますが

どうかご容赦を……

では9月1日までお待ちください

ホントにすいませんなお、このお知らせは9月1日になつたら削除

おせちいただきありがとうございます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5771n/>

---

転生しました.....原因は分かりません

2011年8月24日21時10分発行